



公益財団法人 がん研究振興財団

第45号 2018

表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語のCancerは、ラテン語のままで、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下の淋巴腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、淋巴管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鋏やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ(浸潤)や、方々への飛び火(転移)は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部の苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの―――――――――――――――――なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる;国立がんセンター第3代総長)

— **加 仁** 第45号 目次 -

巻頭言						
公益法人について考える						
田中綜合法律事務所 代表(公益財団法人な	がん研究	5振	興財[団 理	事)	
		田	中	利	彦	 2
トピックス						
~第3期がん対策推進基本計画が閣議決定される	ました~	,				 4
~がん対策基本法、がん対策予算~						 7
特集 1 平成29年度がん研究シンポジウム						
次世代免疫療法・ゲノム医療						
開催報告						
国立がん研究センター中央病院 先端医療科	科長	山	本		昇	
国立がん研究センター東病院 副	院 長	土	井	俊	彦	 8
特集2 平成29年度がんサバイバーシップセミナ	_					
開催報告						
国立がん研究センターがん対策情報センター が	んサバイ	バー	シップ	支援部	部長	
		高	橋		都	 11
平成29年度 各種委員会の動きと採択者の声						
がん研究助成審議会報告		垣	添	忠	生	 14
海外派遣研究助成委員会報告		関	谷	剛	男	 23
看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会報告	냨	桑	原	節	子	 33
HOPE事業等運営委員会報告		上	田	龍	\equiv	 37
がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会報告	-	石	塚	正	敏	 41
ご寄付芳名録						 46
役員・評議員・顧問名簿						 47



公益法人について考える

田中綜合法律事務所 代表 田中 利彦 (公益財団法人がん研究振興財団



「加仁」第45号発刊に際して一言述べる機会を得ましたので、法律家の観点から、 公益法人について日ごろ感じていることの一端を申し述べさせていただきます。

当財団が民法の規定に基づく財団法人として発足したのは今から半世紀前のこと でした。その後、当財団やその活動を取り巻く環境は大きく変化してきました。特に、 平成20年の新公益法人制度の発足は、財団にとって大きな出来事でした。大きく変 わった要点のみを挙げると、法律上の基準に基づく公益法人の認定制度が設けられ たこと、公益目的事業に関する収支・公益目的事業の比率・遊休財産の保有・寄附 の募集・経理等に関する具体的な規制を定めた法令の規定が設けられたこと、広域 の公益法人の場合その監督が内閣府に一元化されたこと、報告の徴求や検査、勧告・ 命令、公益認定の取消しなど監督に関する法令の規定が整備されたこと、税制上の 優遇措置公認を明示した規定が設けられたことなどがあります。従前の民法に基づ く制度の下では、公益に関する社団法人や財団法人は、「主務官庁」(法人の業務対 象の事項を所管する官庁)の許可を受けて設立することができるとされていました が、許可の具体的な要件や手続が法定されていたわけではなく、裁量行政全盛の往 時を偲ばせる制度でした。新制度の発足で、役所と公益法人との関係が、以前より も緊張感のある、いわばよそよそしいものとなったといえるでしょう。

その結果、監督を受ける公益法人においては、手続その他の形式面でのコンプラ イアンスにも神経を使う必要が高くなっています。しかし、このことは、第三者の 立場から見れば、公益法人という特別の資格を付与され、寄附や公益目的事業から の収益に関する税制上の優遇措置を受けている以上当たり前のことということにな るでしょうし、監督を受ける側としては、設立から今に至るまでの間に寄附その他 の支援をしていただいてきた多くの方々に対する説明責任を果たす上で当然の義務 であるという積極的な自覚が必要であると思います。

以上のような制度変更は、かねてよりの行政改革の結果ですが、同様の変更として、 平成14年の閣議決定に始まる行政委託型公益法人改革があります。行政委託型公益 法人とは、国から一定の業務の委託等を受けているか、補助金や委託費等の交付を 受けている公益法人のことですが、これら公益法人が委託等を受けていた業務は独 立行政法人に移されるなどして順次廃止・削減されてきました。その状況下において、 当財団でも、当財団で行った方が効率的である事業について国若しくは独立行政法 人から委託を受ける可能性も残されているとは思いますが、現時点では国からの委 託業務は行っておりません。

こうして、当財団を含む公益法人は、純然たる民間団体として善意の支援に基づ き公益事業を行う団体としての性格付けが徹底されています。他方、過去の反省に 立ってのことではあるのですが、収支相償の原則や遊休財産の保有制限という財務 上の規制もあり、窮屈な財務の運営を余儀なくされています。特に、昨今の異常な 低金利の下では、基本財産の運用益に期待するといっても難しい問題があり、多く の公益法人は、毎期、事業に充てる寄附の獲得をほぼゼロかそれに近い状態から積 み上げることに苦心するという、自転車操業とは言えないまでも、厳しい状況に置 かれています。

こうした制度上の問題はあるのですが、その点はさて措いて公益法人の存在意義 という観点から現状を見た場合、寄附をいただけるだけの有意義な活動をしている かについて、公益法人が厳しい自覚を改めて迫られているということができると思 います。一理事としてではありますが、当財団の歴史の重みをかみしめつつ、当財 団が、時代の要請に適切に対応し、創意工夫を凝らして、見えるかたちで有志の方々 の期待に応え続けられるよう、微力を尽くしたいと考えております。

~第3期がん対策推進基本

第3期がん対策推進基本計画(平

第1 全体目標

「がん患者を含めた国民が、がん

①科学的根拠に基づくがん予防・がん検診の充実 ②患者本位

第2 分野別施策

- 1. がん予防
- (1)がんの1次予防
- (2)がんの早期発見、がん検診 (2次予防)

2. がん医療の充実

- (1)がんゲノム医療
- (2)がんの手術療法、放射線療法、薬
- (3)チーム医療
- (4)がんのリハビリテーション
- (5)支持療法
- (6)希少がん、難治性がん (それぞれのがんの特性に応じた
- (7) 小児がん、AYA(※) 世代のがん、 (※) Adolescent and Young Adult: 思春
- (8)病理診断
- (9)がん登録
- (10)医薬品・医療機器の早期開発・承

4. これらを支える基盤の整備

- (1)がん研究
- (2)人材育成
- (3)がん教育

第3 がん対策を総合的かつ計画的に推進するために必

- 1. 関係者等の連携協力の更なる強化
- 5. 必要
- 2. 都道府県による計画の策定
- 6. 目標
- 3. がん患者を含めた国民の努力
- 7. 基本
- 4. 患者団体等との協力

注) 厚生労働省ホームページより転載(平成30年3月9日)

「がん対策推進基本計画」の変更について

「がん対策推進基本計画」については、がん対策基本法(平成18年法律第98号)に基づき 方向について定めるとともに、都道府県がん対策推進計画の基本となるものである。

今般の変更は、本日同時に閣議決定された「健康増進法の一部を改正する法律案」を踏けて受動喫煙対策を徹底し、本基本計画の計画期間中において、望まない受動喫煙のないたものである。この変更について、本日、閣議決定されたことを踏まえ、別添のとおり、なお、本件は、国会に報告される予定である。

計画が閣議決定されました~

成30年3月9日閣議決定) (概要)

を知り、がんの克服を目指す。」 のがん医療の実現 ③尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築

3. がんとの共生

- 物療法、免疫療法
- (1)がんと診断された時からの緩和ケア
- (2)相談支援、情報提供
- (3)社会連携に基づくがん対策・がん患者支援
- (4)がん患者等の就労を含めた社会的な問題
- (5)ライフステージに応じたがん対策

対策) 高齢者のがん 期と若年成人

認等に向けた取組

、普及啓発

要な事項

な財政措置の実施と予算の効率化・重点化 の達成状況の把握 計画の見直し

策定するものであり、がん対策の総合的かつ計画的な推進を図るため、がん対策の基本的

まえ、受動喫煙に関する個別目標として、「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向 社会をできるだけ早期に実現することを目標とする。」を、本基本計画に盛り込むこととし その内容を公表する。

健康増進法の一部を改正する法律案(平成30年3月9日閣議決定)概要

健康増進法の一部を改正する法律案 概要

改正の趣旨

望まない受動喫煙の防止を図るため、多数の者が利用する施設等の区分に応じ、当該施設等の一定の場所を除き喫煙を禁止するとともに、当該施設等の管理について権原を有する者が講ずべき措置等について定める。

【基本的考え方 第1】「望まない受動喫煙」をなくす

受動喫煙が他人に与える健康影響と、喫煙者が一定程度いる現状を踏まえ、屋内において、受動喫煙にさらされることを望まない 者がそのような状況に置かれることのないようにすることを基本に、「望まない受動喫煙」をなくす。

【基本的考え方 第2】受動喫煙による健康影響が大きい子ども、患者等に特に配慮

子どもなど20歳未満の者、患者等は受動喫煙による健康影響が大きいことを考慮し、こうした方々が主たる利用者となる施設や、 屋外について、受動喫煙対策を一層徹底する。

【基本的考え方 第3】施設の類型・場所ごとに対策を実施

「望まない受動喫煙」をなくすという観点から、施設の類型・場所ごとに、主たる利用者の違いや、受動喫煙が他人に与える健康影響の程度 に応じ、禁煙措置や喫煙場所の特定を行うとともに、掲示の義務付けなどの対策を講ずる。

その際、既存の飲食店のうち経営規模が小さい事業者が運営するものについては、事業継続に配慮し、必要な措置を講ずる。

改正の概要

1. 国及び地方公共団体の責務等

- (1) 国及び地方公共団体は、望まない受動喫煙が生じないよう、受動喫煙を防止するための措置を総合的かつ効果的に推進するよう努め
- (2) 国、都道府県、市町村、多数の者が利用する施設等の管理権原者その他の関係者は、望まない受動喫煙が生じないよう、受動喫煙を 防止するための措置の総合的かつ効果的な推進を図るため、相互に連携を図りながら協力するよう努める。
- (3) 国は、受動喫煙の防止に関する施策の策定に必要な調査研究を推進するよう努める。

2. 多数の者が利用する施設等における喫煙の禁止等

- 多数の者が利用する施設等の類型に応じ、その利用者に対して、一定の場所以外の場所における喫煙を禁止する。
- (2) 都道府県知事(保健所設置市区にあっては、市長又は区長。以下同じ。)は、(1)に違反している者に対して、喫煙の中止等を命ず ることができる。

【原則屋内禁煙と喫煙場所を設ける場合のルール】

			経過措置
A 学校・病院・児童福祉施設等、行政機関 旅客運送事業自動車・航空機	禁煙 (敷地内禁煙(※1))	当分の間の措置	
B 上記以外の多数の者が利用する施設、 旅客運送事業船舶・鉄道	原則屋内禁煙	【加熱式たばこ (※2) 】	別に法律で定める日までの間の措置
飲食店	・ (喫煙専用室(喫煙のみ)内 でのみ喫煙可)	原則屋内禁煙 (喫煙室(飲食等も可)内 での喫煙可)	既存特定飲食提供施設 (個人又は中小企業(資本金又は出資の総額 5000万円以下(※3)) かつ 客席面積100㎡以下の飲食店) 標識の掲示により喫煙可

- ※1 屋外で受動喫煙を防止するために必要な措置がとられた場所に、喫煙場所を設置することができる。 ※2 たばこのうち、当該たばこから発生した煙が他人の健康を損なうおそれがあることが明らかでないたばことして厚生労働大臣が指定するもの。 ※3 一の大規模会社が発行済株式の総数の二分の一以上を有する会社である場合などを除く。 注: 喫煙をすることができる場所については、施設等の管理権原者による標識の掲示が必要。 注: 公衆喫煙所、たばこ販売店、たばこの対面販売(出現販売によるものを含む。)をしていることなどの一定の条件を満たしたパーやスナック等といっ 公衆喫煙所、たばこ販売店、たばこの対面販売(出張販売に。 た喫煙を主目的とする施設について、法律上の類型を設ける。
- (3) 旅館・ホテルの客室等、人の居住の用に供する場所は、(1)の適用除外とする。
- (4) 喫煙をすることができる室には20歳未満の者を立ち入らせてはならないものとする。
- (5) 屋外や家庭等において喫煙をする際、望まない受動喫煙を生じさせることがないよう周囲の状況に配慮しなければならないものとす る。

3. 施設等の管理権原者等の責務等

- (1) 施設等の管理権原者等は、喫煙が禁止された場所に喫煙器具・設備(灰皿等)を設置してはならないものとする。
- (2) 都道府県知事は、施設等の管理権原者等が(1)に違反しているとき等は、勧告、命令等を行うことができる。

4. その他

- (1) 改正後の健康増進法の規定に違反した者について、所要の罰則規定を設ける。
- (2) この法律の施行の際現に業務に従事する者を使用する者は、当該業務従事者の望まない受動喫煙を防止するため、適切な措置をとる よう努めるものとする。
- (3) 法律の施行後5年を経過した場合において、改正後の規定の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果 に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

2020年4月1日 (ただし、1及び2(5)については公布の日から起算して6月を超えない範囲内において政令で定める日、2.A二重線 部の施設に関する規定については公布の日から起算して1年6月を超えない範囲内において政令で定める日)

~がん対策基本法、がん対策予算~

○がん対策基本法(平成18年法律第98号) (平成18年6月成立、平成19年4月施行、平成28年12月改正・施行)

がん対策を総合的かつ計画的に推進



第一節:がん予防及び早期発見の推進

- がんの予防の推進
- がん検診の質の向上等

第二節:がん医療の均てん化の促進等

- 専門的な知識及び技能を有する医師その他の 医療従事者の育成、医療機関の整備等
- がん患者の療養生活の質の維持向上
- がん医療に関する情報の収集提供体制の整備等

第三節:研究の推進等

- がんに関する研究の促進並びに研究成果の活用
- 罹患している者の少ないがん及び治癒が特に困 難であるがんに係る研究の促進

第四節:がん患者の就労等

- がん患者の雇用の継続等
- がん患者における学習と治療との両立
- 〇 民間団体の活動に対する支援

第五節:がんに関する教育の推進

学校教育等におけるがんに関する教育の推進

○がん対策の推進

30年度予算 358億円(29年度予算額 314億円)

平成30年3月に策定した第3期がん対策推進基本計画に基づき、「がん予防」「がん医療の充実」「がんとの共生」の三つを柱とした 施策を実施することで、がん対策の一層の推進を図る。



子宮頸がん・乳がん検診の初年度対象者に対するクーポン券等の配布について継続するとともに、がん検 診対象者等に対して、受診率向上に効果的な個別の受診勧奨・再勧奨、要精検受診者に対する受診再勧 奨を実施する。

医療の充実



(がんゲノム)

- がんゲノム医療提供体制の構築を図るため、「がんゲノム医療中核拠点病院」の整備とともに、がんゲノム 医療情報の集約・管理・利活用を図るため、「がんゲノム情報管理センター」を設置する。
 - がんのゲノム医療の特殊性に対応できる人材を育成するため、がん診療連携拠点病院等の医療従事者を 対象とした研修を実施する。

(希少がん)

- ・希少がん対策の中核的な役割を担う「希少がん中央機関」において、病理コンサルテーションの集約化、 情報提供等を一体的に実施する。
- 希少がんにおける病理診断の質の向上に必要な知識と技術を身につけるため、希少がん病理画像を収集 し、診断支援システムを構築するとともに収集された画像を用いた人材育成を実施する。



(患者支援)

- がん相談支援センターにて、各個人の状況に応じた「治療と仕事の両立プラン」の策定などを行うモデル (新) 事業を実施する。
- 患者団体及び関係学会と連携し、ピア・サポート研修プログラムを改定するとともに、がん患者・経験者等に 対して、ピア・サポートや患者サロンに関する研修を実施する。

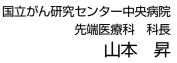
国

民

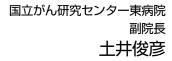
特集

平成29年度がん研究シンポジウム 次世代免疫療法・ゲノム医療

開催報告









平成30年3月16日(金)および3月17日(土) の2日間、国立がん研究センター築地キャンパス・ 新研究棟・大会議室において、公益財団法人がん 研究振興財団・平成29年度がん研究シンポジウ ムが開催されました。平成29年度のテーマは、 昨今の癌診療・研究において注目度・期待度が高 まっている「次世代免疫療法・ゲノム医療」とし、 各分野における第一人者11名を招聘、約200名 の国内の医師、研究者、製薬企業からなる参加者 により、活発な意見交換が行われました。

第1日目

第1日目は、次世代免疫療法として、6名の研 究者より講演をいただきました(下記、プログラ ム参照)。すでに複数のがん腫に対して、免疫 チェックポイント阻害剤(抗PD-1, PD-L1抗体、 抗CTLA-4抗体)が承認されるとともに、標準的 治療としての重要な位置づけを担っています。腫 瘍細胞におけるPD-L1の発現状態で治療適応、 効果予測の判断が行われているのが現状ですが、 その治療効果については、依然として多くの課題 が残されています。この第1日目では、これまで のPD-L1の発現状態という既存概念を超えて、

ゲノム異常や代謝メカニズムなど、より深い部分 への研究による作用機序解明の報告がなされまし た。さらに、現在の次世代免疫療法の筆頭候補と して、CAR-T療法、TCR療法が紹介されました。 CAR-T療法はすでに造血器系悪性腫瘍に対して 米国で承認が得られていますが、固形がんに対す る効果については、未だ十分な結論は得られてい ません。本会では、固形がんに対する次世代 CAR-T療法の開発について紹介され、また、 TCR療法については、現在進行中の医師主導治 験において、一部の患者さんは劇的な奏効が得ら れていることも報告されました。

第2日目

第2日目は、ゲノム医療として、5名の研究者 より講演をいただきました(下記、プログラム参 照)。がん細胞の遺伝子異常(遺伝子変異・遺伝 子融合など) に基づいた薬剤開発・治療実施は、 今や、がん薬物療法の標準的プロセスといえます が、特定の遺伝子異常を疾患毎に検索する手法か ら、複数の遺伝子異常を一度に検索する網羅的手 法に移行しつつあります。折しも米国ではNGS パネル検査が承認され、日本でもNGSパネル検 **査の承認を見据えた先進医療も開始されたところ** です。この第2日目では、次世代ゲノム医療とし て、これまでの研究成果に基づく個別化治療の展 開、希少フラクションに対する薬剤開発をはじめ として、NGSパネル検査の開発展望・課題につ

いて紹介されました。2000年代から怒濤の勢い で導入が開始された分子標的薬は、このゲノム医 療の展開によって、次のステージへ向かうものと 思われます。

平成30年3月16日(金)-17日(土)

1日目:次世代免疫療法

Session 1

「CAR-T細胞療法: 固形がんに対する次世代免疫療法の可能性」

山口大学大学院医学系研究科 免疫学

教授 玉田 耕治先生

「TCR遺伝子改変T細胞輸注(TCR-T療法)の臨床開発」

三重大学大学院医学系研究科 遺伝子・免疫細胞治療学

教授 影山 愼一先生

Session 2

「免疫代謝促進によるPD-1阻害治療の増強効果とその作用機序解明」

京都大学大学院医学研究科 免疫ゲノム医学

特定講師 茶本 健司先生

「様々な悪性腫瘍で認められるPD-L1/2ゲノム異常」

国立がん研究センター研究所 分子腫瘍学分野

分野長 片岡 圭亮先生

「Oncolytic virus therapy の現状」

国立がん研究センター東病院 消化管内科

医長 小島 隆嗣先生

「免疫ゲノム解析によるがん免疫応答の解明 |

国立がん研究センター先端医療開発センター 免疫TR分野

分野長 西川 博嘉先生

2日目:ゲノム医療

Session 3

「がん研究が導くゲノム医療」

国立がん研究センター研究所

所長 間野 博行先生

「肺癌における遺伝子スクリーニングネットワーク(LC-SCRUM-Japan)の構築と

個別化医療の確立への挑戦」

国立がん研究センター東病院 呼吸器内科

科長 後藤 功一先生

Session 4

「バイオマーカー情報を利用した臨床開発~MASTER KEY Projectとは~」

国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科

医長 米盛 勧先生

「NGSパネル検査を用いたがんゲノム医療」

国立がん研究センター研究所 ゲノム生物学研究分野

分野長 河野 隆志先生

「がんゲノム医療提供体制に関する取組について」

厚生労働省健康局 がん・疾病対策課

課長補佐 上野 秀樹先生

終わりに

例年の国際がん研究シンポジウムと異なり、今 回は、演者をすべて国内から招聘したこともあり、 意見交換は日本語で行われました。「国際」とい う枕詞にそぐわなかった部分もありますが、意見 交換の密度は十分に高く、とかく遠慮がちと思わ れる製薬企業の研究者からも積極的な発言がみら れたことは大きな収穫でありました。今や、創薬 において、製薬企業が担うべき部分への期待は高 まるばかりであり、意見交換を通じて、その期待 の高まりを再認識しました。最後に、本がん研究 シンポジウムの開催、演者招聘、運営に尽力いた だきましたがん研究振興財団のスタッフの皆様、 堀田知光財団理事長に深謝申し上げます。

特集 2 平成29年度がんサバイバーシップセミナー

開催報告

国立がん研究センターがん対策情報センターがんサバイバーシップ支援部長がんサバイバーシップを援部橋 都 (平成29年度がんサバイバーシップセミナー組織委員長)



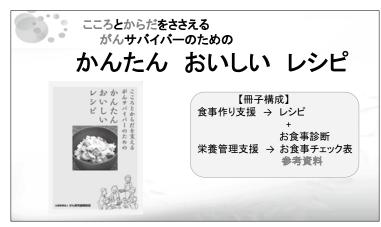
平成30年1月22日に平成29年度がんサバイ バーシップセミナーが開催され、約140名が参加 しました。当日の様子についてご報告します。

昨年同様、セミナーに先立つ午前中は「がんサバイバーシップ研究支援事業」成果発表会が開かれ、平成28年度助成金交付を受けた9名が研究成果を報告しました。今年度はそれに引き続き、(公財)日本対がん協会会長垣添忠生先生から、同協会の「がんサバイバー・クラブ」の活動紹介と、先生が始められる「がんサバイバー支援ウォーク」に関するご講演がありました。「がんサバイバー支援ウォーク」とは、垣添先生が全国の32病院を歩いて繋ぐ、総移動距離3,500キロにおよぶ壮大なウォーキングプロジェクトです。その様子は(公財)日本対がん協会の特設サイトで詳しくレポートされています(https://www.gsclub.jp/walk)。

垣添先生のご講演に引き続き、約2時間を使ってがんサバイバーシップセミナーが開催されました。今年度の大テーマは「今日からできるセルフケア」。がんサバイバーシップのテーマはきわめて広いのですが、がんと診断されたご本人やご家族が自ら取り組めるセルフケアについて考えようという趣旨です。セルフケアの中でも特に、「おいしく食べる」「か

らだを動かす」「仲間をつくる」という3つの側面を取り上げました。当日の参加者は、がん経験者ご本人、ご家族、医療者、行政関係者、企業関係者等、多岐に渡りました。また、首都圏や関東近県だけでなく、大阪、石川、岡山、佐賀、沖縄などからの申し込みもあり、がんサバイバーシップへの興味の高まりを実感する機会となりました。まず「おいしく食べる」セクションでは、東京即学士学の管理学業士、宮内皇子生せば、「愛情

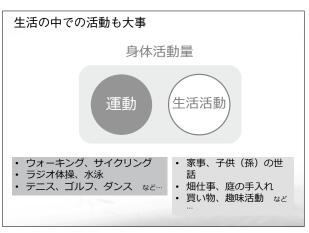
里栄大学の管理栄養士、宮内眞弓先生が、「愛情たっぷり簡単料理」と題して「こころとからだを支える・がんサバイバーのためのかんたんおいしいレシピ」(スライド1)の作成と具体的なレシピ内容についてご紹介くださいました。このレシピ集は宮内先生が本財団の「がんサバイバーシップ研究支援事業」の助成を受けて作成したもので、毎日新聞でも紹介されました。がん経験者やご家



スライド1

族にとって、治療に向き合いながら生活を整える ためには「食」は重要課題です。しかし、闘病や 看病の中でいざ食事作りの場面になると、「買い 物の仕方」「仕事や育児と時間の調整」「独居によ る食材の無駄 | 「初めて料理をしなければならな い家族の問題」など、さまざまな問題があること に気づきます。宮内先生は、「食」の問題を治療 の副作用よりも広くとらえ、料理がなかなかうま くできない患者さんやご家族への対応という、見 逃されやすい領域に着目しました。そこで、料理 を難しく考えず、身近にある食材で簡単に作れる 料理を紹介したいと考えられたのだそうです。ご 講演では、コンビニで入手できる食材を使った簡 単料理のレシピに加えて、食事量や内容の過不足 をセルフチェックする「お食事チェックシート が提案され、さらにおいしく食べるヒントも紹介 されました。レシピや「お食事チェックシート」 は患者さんのアンケートによって評価され、今後 改定が予定されているそうです。

続いて「からだを動かす」セクションでは、国 立がん研究センター東病院の理学療法士、立松典 篤先生から、「がんサバイバーにおける運動の重 要性」と題してご講演がありました。まず、リハ ビリテーションという言葉がRe〔再び〕と Habilis(適した)からきており、「患者さんが、 もてる能力を最大限に発揮し、人権が尊重され、 生きがいをもった生活を送れるように、患者さん やその家族を中心に共通の目標に向かって援助す る活動」という定義が示されました。また、特に がんリハビリテーションにおける Dietz 分類(予 防的、回復的、維持的、緩和的リハビリテーショ ン)が紹介されました。そしてご講演は、がんリ ハビリテーション領域を超えて、がんサバイバー にとってからだを動かすことは重要なのか、サバ イバーにとって運動は安全なのか、という話題に も及びました。サバイバーは、倦怠感などから動 かない/動けない状態になり、ますます体力が低 下するという悪循環や、場合によっては廃用症候 群に陥ることがあります。しかし、身体活動が予 後を改善し再発率を減らすという研究も蓄積され ています。アメリカがん協会の運動ガイドライン では、定期的に運動することや、低~中等度の運 動から併存疾患に注意して運動すること、そして 最初の目標は今よりも活動的な生活にすること、 とされていることも紹介されました。今日からで きるセルフエクササイズとしては、自宅でできる ストレッチ、筋力(レジスタンス)トレーニング、 ウォーキング(有酸素運動)の方法が具体的に示 されました。また、立松先生は、運動として行う 身体活動に加えて、生活活動の中でからだを動か すことの大切さ、たとえば家事、子供の世話、畑 仕事、買い物、趣味活動等を通じた身体活動にも 意味があることにも言及されました (スライド 2)。今後、がん治療中や治療後の、生活全般の 活性化に向けた実証研究が一層重要になっていく と思われます。



スライド2

最後に、NPO法人がんノート代表理事の岸田 徹さんから「仲間をつくる」ことに関するご講演 がありました。システムエンジニアとして働いて いた岸田さんは、25歳で胎児性がんに罹患し、 再発も経験されました。がん治療を通じて抱いた 孤独感に向き合う中で、「同じく孤独な人はいる はず」と考えた岸田さんは、得意の技術を使って、 ご自身のがん体験について社会発信を始めること を考えます。まずはブログの発信から始め、続い

て35歳以下でがんに罹患した人のための患者会 である「STAND UP!!」(http://standupdreams. com/) に入会します。そこで「がんの種類は違 えど同じ境遇だ!」と実感した岸田さんは、さら に、さまざまなソーシャルネットワークサービス (Facebook, twitter, Instagram, LINE等) を通 じて、人とのつながりを拡げ、そしていよいよ、「が ん経験者のがん経験者によるがん経験者のための <生のインタビュー型情報発信番組>」である「が んノート」(http://gannote.com/) の立ち上げに 至ります。「がんノート」とは、岸田さんがイン タビュアーとなってさまざまな背景のがん経験者 の方々のお話を聞き、そのトークをインターネッ ト上のニコニコ生放送やFRESH!で放送すると いう取り組みです。上記の「がんノート」公式サ イトからは、過去の動画を視ることもできます。 収録は国立がん研究センター中央病院内のレスト ランで行われ、申込者に公開されています。ちな みに、「がんノート」という言葉は、「がんの音」「が ん経験者たちの手~GANNOTE」にも掛けてい るそうです。ご講演の中で岸田さんは、ブログか らがんノートに至る活動を、「まじる(= STAND UP!!への参加)」、「つながる(=コミュ ニケーションの場としてのSNS)」、「つたえる(= 「がんノート」による発信)」という3段階で表現 されていました。「つながる」ことががん患者の 孤独を解消し、「つたえる」ことが他の患者に役 に立つ、そして仲間をつくるきっかけになる、と 岸田さんは語ります。希少がん患者さんのインタ ビューを放送したときには、それを見た患者さん やご家族から連絡があり、お互いにつながるきっ かけになったそうです。最後のスライドには大き く、「みなさんは誰に今日のことを『つたえます か?』」とありました(スライド3)。「がんノート」 は、インターネットを通じて多くの方々のがん経 験をつなぎ、社会につたえる活動です。しかし、 たとえ特別な技術を持たなくても、自らが発信者 となって周囲に何かをつたえることはできる、と

みなさんは 誰に今日のことを 「つたえますか?」

スライド3

いう強いメッセージを感じました。

3名のスピーカーのご講演に続いて行われた質 疑応答では、食や身体活動について個別のアドバ イスを得る方法や、研究活動における患者会と研 究者の協働などについて、活発な議論が交わされ ました。治療を受けるご本人やご家族がセルフケ アをスムーズに進めるためには、今後、食・運動・ 社会的なつながりなどに関する実証研究の一層の 蓄積が不可欠でしょう。そして、ご本人やご家族 が個別の疑問を相談できる窓口や、継続的に助言 してくれるサポーターとの出会いも必要だと思わ れます。今回の「がんサバイバーシップセミナー」 全体を通じて、研究から得られたエビデンスの生 成と、それを本来の生活の場である地域社会での 実践につなげる社会実装の、両方が重要であるこ とを実感しました。

がん研究助成審議会報告

委員長

垣添 忠生

(公益財団法人日本対がん協会 会長)

がん研究振興財団の、第50回研究助成審議会の概略を御報告する。

本研究助成は、がん研究振興財団に寄せられた一般の方々、特にがん治療を受けられた方々、あるいは亡くなった方の御遺族からの御寄附を原資としている。

その意味で、国の各種研究助成金や、各種財団の研究助成金とは一線を画する。審査に当る委員全員も、 この点を強く頭に置いて作業に臨んだ。

審議会は平成30年1月17日(金)13:00~14:30、がん研究振興財団会議室で開かれた。

委員6名は以下の諸氏で、

垣添忠生(委員長)、上田龍三、坂本亨宇、関谷剛男、鳶巣賢一、山口俊晴、(敬称略)、全員御出席いただいた。

財団事務局からは堀田理事長、西山事務局長、石川総務部長の3名が参加した。

堀田理事長による開会挨拶の後に議事に入った。前回議事録要旨について、特に問題なし、ということで その確定を行った。

(1) 委員長の互選

事務局長から「がん研究助成審議会規則、第4条」により委員長の互選について説明があり、垣添委員が委員長に互選された。

(2) 平成29年度 (第50回) がん研究助成について

研究助成金A課題は、わが国でがん研究に従事している日本人研究者の個人またはグループが対象で、一課題100万円。A課題には116件の応募があった。A課題の助成予定は20件であるが、各委員による事前評価を踏まえて、個別に審査した結果、19件が確定した。残り1名については、審議の結果今年度は見送りとなった。(よって、次ページの通り19名が採択された)

B課題は看護師、技師(放射線・検査)、栄養管理士、放射線医学物理士、臨床心理士等を対象とし、一課題50万円。本年は39件の申請があり、各委員による事前評価を元に個別に全員で審議した結果、9件が確定された。残る1名については、今年度は見送ることとなった。(以上により、次ページの通り9名が採択された)

- ○事務局から助成金申請の所要経費のうち海外における学会出席経費について、当財団の「海外派遣研究 助成事業」との関連について委員会に確認があった。
- ○委員会の見解
 - がん研究助成金については、審査において学会出席も当然認めていることから他の助成金申請の必要はない。
 - 学会参加費用については、事務局において執行、清算等必要確認を行うこと。

(3) その他

- ○委員長からその他について事務局に意見を求めたところ次の提案があった。 事務局長から平成30年度のがん研究助成金について応募数の増が見込まれることから、
 - ① A課題については、予算額との関係から100万円を減額し助成件数を増やすこと
 - ② A課題とB課題を統合すること
 - ③ 応募年齢を明記すること

○委員会での意見

- ① について
 - がん研究助成金は、50年にわたってがん研究助成金の先駆けとして行って来た事業であり、この間 厚生科研費が認められるなど評価に値する。本助成金の趣旨からすれば財源問題で助成金額を減額 する意味がない。
- ② について
 - B課題については研究助成目的が明確にされており、特にコメディカル部門の研究助成は有意義で ある。
- ③ について
 - 応募資格として申請課題に対し総額1,000万円以上の外部研究費取得者は対象外になっており、研究 費獲得に困難な者が対象となっているので年齢制限の必要はない。
 - 申請課題に対する外部研究費の扱いについて切り口を変えた申請など疑義が生じる例も考えられる ので、学位取得後何年以内等を明記することも次年度応募要領で検討してはどうか。

○事務局から

• 次年度の公募に当たっては、各委員に事前に応募要領を諮問のうえ実施する。

H29 年度がん研究助成金採択者

[A 課題]

	氏名	所属機関	研究課題名
1	増田 万里	国立がん研究センター研究所	大腸がん幹細胞を標的とする TNIK 阻害剤が作用する分子ネットワークの解明
2	阪口 政清	岡山大学大学院	がん細胞の転移を加速するがん微小環境内線維芽細胞の新たな役割
3	宮崎 正輝	京都大学ウィルス・再生医科学研究所	転写制御因子 Id2/Id3 による悪性リンパ腫発生の分子機構の解明
4	神田 浩明	(公財)がん研究会がん研究所	大腸癌肝転移病巣病理検体を用いた化学療法感受性予知因子の解析
5	山口貴世志	東京大学医科学研究所	大腸がんの遺伝的リスク評価のための APC がん抑制遺伝子の転写調節領域の解明
6	熊谷 厚志	がん研究会有明病院	高度リンパ節転移を伴う胃癌に対する術前化学療法後の至適リンパ節郭清に関する研究
7	小山理恵子	国立がん研究センター研究所	難治な希少がんである CIC-DUX 4肉腫の新しい治療法の開発:世界初の患者由来がん モデルを用いた融合遺伝子の機能解析および適応拡大に向けたシーズの探索と検証
8	谷口 浩二	慶應義塾大学	消化器癌における Src-YAP 経路の機能解析
9	河合 隆之	京都大学大学院	肝細胞癌における keratin19 陽性癌幹細胞を標的とした新規治療戦略構築
10	金子 修三	国立がん研究センター研究所	細胞画像データを用いた深層学習に基づく "がん" エピジェネティクスの本態 解明
11	武島 嗣英	国立研究開発法人放射線医学総合 研究所	放射線がん治療後に誘導される抗腫瘍免疫応答を利用した新規がん治療法の開発
12	平塚 真弘	東北大学大学院	フッ化ピリミジン系抗がん剤の副作用予測を目指した代謝酵素レアバリアント の網羅的機能解析
13	新井 康之	京都大学大学院 (米国国立衛生研究所出向)	CRISPR/Cas9 によるゲノム編集技術を用いた、効果増強型キメラ抗原受容体(CAR) T細胞の開発
14	野村基雄	京都大学附属病院	根治切除不能な粘膜黒色腫に対する Immune -checkpoint inhibitor+radiotherapy の第 II 相臨床試験
15	高橋 真美	国立がん研究センター研究所	膵臓がん PDX の同所移植モデルを用いたがん…間質相互作用・脂肪浸潤に関する解析
16	上山健彦	神戸大学バイオシグナル総合研究 センター	新しい標的分子に着目した神経膠芽腫に対する新規治療薬開発への挑戦とその 応用
17	福島 紘子	筑波大学	陽子線治療を受けた小児がん患者の長期予後評価
18	伊藤 寛倫	がん研究会がん研有明病院	胆汁を用いたリキッドバイオプシーの確立と胆管がん術前診断への応用
19	山極 洋子	国立がん研究センター	大規模コホート研究における新たな肝がんリスク評価を目指した血液を用いた 非アルコール性脂肪性肝疾患関連指標の妥当性研究

[B 課題]

L- 1								
	氏名	所属機関	研究課題名					
1	高山佳樹	東北大学病院	前立腺がんに対するオンライン適応放射線治療確立に向けた高精度かつ迅速な 自動輪郭抽出システムの開発					
2	井上博文	岡山大学病院	T erahertz chemical microscope を用いた病理組織検体割面 imaging 化の基礎的研究〜遺伝子検査用検体の迅速採取に向けて〜					
3	勝田義之	一般財団法人竹田綜合病院	高精度放射線治療における高精度な治療効果予測システムの開発					
4	井上 一雅	首都大学東京大学院	Radium-223 の合理的な放射線管理を目的とした可搬型 α 線スペクトロメータ の開発と実用化					
5	松田和之	信州大学医学部附属病院	遺伝子変異特異的定量PCR法を用いた若年性骨髄単球性白血病に対する分子標的薬効果の検証					
6	中山貴美子	神戸大学大学院	子育て世代のがんサバイバーのエンパワメント過程に関する研究					
7	大坂和可子	東京慈恵会医科大学	術式選択に悩む乳がん患者と医療者のシェアドディシジョンメイキングを促進 するディシジョンエイドの臨床導入に関する多施設研究					
8	上畑 陽子	東京大学医学部附属病院	膵癌化学療法患者における栄養状態の動向と化学療法の実績についての現状調査					
9	小原 泉	自治医科大学	がん臨床試験における意思決定支援の課題抽出のための尺度開発					

A課題

氏 名 所属施設名及び職名

増田 万里

■国立がん研究センター研究所 細胞情報学分野 主任研究員



研究課題名

大腸がん幹細胞を標的とするTNIK阻害剤が作用する分子ネットワークの解明

大腸がんの90%以上にWntシグナル経路の遺伝子に変異があり、同経路が恒常的に活性化している。我々はがん幹細 胞の発生・維持に関与する同経路を最下流で遮断し、大腸がんの根治を目指すTNIK阻害剤NCB-0846を開発している。 NCB-0846及びTNIK阻害活性の無い異性体NCB-0970で処理した大腸がん細胞株について、逆相タンパク質アレイ法を 用いて、細胞内シグナル伝達経路のプロファイルを取得している。本研究では、NCB-0846が惹起するアポトーシスの作用 機序の詳細を解明し、シグナルプロファイルを用いてコンパニオンマーカーを探索し、本薬剤の高精度医療の開発を目指す。

阪口 政清

■岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 独立准教授



がん細胞の転移を加速するがん微小環境内線維芽細胞の新たな役割

膵臓がんは、その特性として多くが間質細胞の増加を伴っている。これによりがん細胞の増殖や転移が高まる。我々 は、これまでの研究から、がん微小環境下で放出されるS100A11が、間質線維芽細胞に作用することで、がん進 展を著しく加速することを見出した。しかし、S100A11がどのようなメカニズムで線維芽細胞をがん進展に寄与させ ているのか完全には解明できていない。 したがって本計画では、 膵がんと間質線維芽細胞のコミュニケーションツー ルとして重要なS100A11の膵がん進展における役割を解明する。

宮崎 正輝

■京都大学ウィルス・再生医科学研究所 再生免疫分野 准教授



転写制御因子Id2/Id3による悪性リンパ腫発生の分子機構の解明

転写制御因子Id2/Id3は、bHLH型転写因子E2Aを抑制することで機能しており、またヒトBurkittリンパ腫にお いてId3のHLH領域に高頻度に点変異が認められているが、その分子機構については未解明である。本研究 では、Id2/Id3欠損マウスを用いて、最新の分子生物学的解析を行い、リンパ腫への進展における分子病態を 解明することを目的とする。 本研究は、 モデルマウスを用いることでヒト検体では解析が困難である時系列解析 が可能となり、病態の解明に繋がる有意義な基礎研究課題であると考える。

神田 浩明

■(公財)がん研究会がん研究所 病理部 主任研究員



大腸癌肝転移病巣病理検体を用いた化学療法感受性予知因子の解析

研究内容

大腸癌においては、原発巣のコントロールよりも転移巣における化学療法の奏効率が予後に影響することが多い ことから、転移巣における治療抵抗性のメカニズムの究明は喫緊の課題である。大腸がん肝転移は転移結節に より化学療法感受性が異なることが多い。本研究はこのような化学療法感受性について多様性を示す転移巣を 切り口として、当院に蓄積した約500例の大腸がん肝転移巣及びその原発巣のヒト手術検体を対象として、種々 の蛋白、mRNAの発現を検討して治療抵抗性を示す大腸癌のサブタイプの特定を目指す。

山口 貴世志

■東京大学医科学研究所 臨床ゲノム腫瘍学分野 特任講師



大腸がんの遺伝的リスク評価のためのAPCがん抑制遺伝子の転写調節領域の解明

がん抑制遺伝子APCの生殖細胞系列の異常は家族性大腸腺腫症の原因であり、大腸腺腫の発生に関与して いる。我々は家族性大腸腺腫症患者にAPC遺伝子のプロモーター領域を含む約10 kbの欠失を発見し、APC の転写に必須な領域であることを明らかにした。この領域はプロモーター 1Bと呼ばれ、その詳細な調節領域は わかっていない。本研究では散発性大腸がんの遺伝的要因として、APC遺伝子の新たな発現調節領域に存 在する稀な遺伝子多型を解析するために、詳細な調節領域を明らかにするとともにその中のSNPを探索する。

氏 名

所属施設名及び職名

熊谷 厚志

■がん研究会有明病院 消化器外科 副医長



研究課題名

高度リンパ節転移を伴う胃癌に対する術前化学療法後の至適リンパ節郭清に関する研究

研究内容

高度リンパ節転移を伴う胃癌に対する標準治療は、術前化学療法+手術である。根拠となったJCOG0405試験をはじめ、これまでの臨床試験では、化学療法後に大動脈周囲リンパ節郭清を伴う拡大手術が行われてきたが、比較的良好な予後が得られるようになったのは術前化学療法の進歩によるところが大きいと考えられる。本研究では、高度リンパ節転移を伴う胃癌に対する「術前化学療法+拡大リンパ節郭清手術」という今日の暫定標準治療のうち、リンパ節郭清部分を見直し、より低侵襲な手術で同等の治療効果を達成することを目的とする。

小山 理恵子

■国立がん研究センター研究所 創薬標的シーズ評価部門 特任研究員



研究課題名

難治な希少がんであるCIC-DUX 4肉腫の新しい治療法の開発: 世界初の患者由来がんモデルを用いた 融合遺伝子の機能解析および適応拡大に向けたシーズの探索と検証

研究内容

ユーイング肉腫様小円形細胞肉腫の一つCIC遺伝子再構成肉腫は、5年生存率が30%程度で多くは転移が認められ、予後が悪い。同肉腫は発症率が低く、治療法開発等の研究が困難である。我々はCIC-DUX4融合遺伝子陽性の同肉腫から細胞株を樹立し、遺伝子複製に特化したプロテオームプロファイルを確認、約200の既存承認薬から抗腫瘍効果のスクリーニングを完了した。本研究では、同融合遺伝子による発症機構の解明を目指す。さらに、治療標的についても抗がん剤投与前後で検証したい。

谷口 浩二

■慶應義塾大学 医学部 微生物学·免疫学 特任准教授



研究課題名

消化器癌におけるSrc-YAP経路の機能解析

研究内容

消化器がんによる死亡率は依然として高く、早期であれば内科的治療や外科的切除が可能であるが、進行がんやがんの再発には主に化学療法が行われ、その効果は限定的である。免疫療法として免疫チェックポイント阻害剤が注目されているが、メラノーマなどでは良好な結果が出ている一方、多くの大腸がんではあまり効果がない事が報告されている。そこで、本研究では炎症によって活性化される新規シグナル伝達経路の消化器がんにおける役割を明らかにし、消化器がんでの新規治療標的としての可能性を検討する。

河合 隆之

■京都大学大学院 医学研究科 肝胆膵·移植外科 医員



研究課題名

肝細胞癌におけるkeratin19陽性癌幹細胞を標的とした新規治療戦略構築

研究内容

肝細胞癌の治療効果を改善するためには、転移・再発の中心的役割を担う癌幹細胞を標的とした新規治療法の開発が重要である。これまでに我々は、Keratin 19 (K19) を肝細胞癌における新規癌幹細胞マーカーとして同定し、また、脱細胞化肝臓を用いた癌細胞の3次元立体培養技術を開発してきた。本研究では、この肝細胞癌3次元立体培養技術を用いてK19陽性癌幹細胞の挙動と転移メカニズムを明らかにするとともに抗腫瘍薬の有効性を検証することにより、K19陽性肝細胞癌に対する新規治療戦略の構築を目指す。

金子 修三

■国立がん研究センター研究所 がん分子修飾制御学分野 ユニット長

研究課題名

細月

細胞画像データを用いた深層学習に基づく"がん"エピジェネティクスの本態解明

研究内容



"がん"という病態の本態解明において、エピジェネティクスの重要性が認識されているが、統一的な解析手法が確立されておらず、近年急速に進歩している人工知能の中核的アルゴリズムである深層学習を用いた解析の可能性が示唆されている。本研究では、臨床検体を用いたシングルセルレベルでのオープンクロマチン画像情報を取得し、深層学習を行う。得られた画像特徴は、NGS解析を用いて解析し、生化学・分子生物学的意義を解明する。以上の結果に基づき、病理解析技術の開発及び分子標的治療薬の効果予測に繋げていく。

氏 名

所属施設名及び職名

武島 嗣英

■国立研究開発法人放射線医学総合研究所 臨床研究クラスタ 重粒子線治療研究部 主任研究員



研究課題名

放射線がん治療後に誘導される抗腫瘍免疫応答を利用した新規がん治療法の開発

近年の放射線照射技術の進歩により放射線治療後の腫瘍制御率は向上しているものの、遠隔転移巣への対策は 十分とは言えず、未だに満足な生存率は得られていない。これを向上させるには、放射線治療に加えて副作用が 少ない他の治療法との併用が望ましい。最近の研究で、放射線治療後に患者体内の抗腫瘍免疫が活性化し、そ れが治療の効果に寄与することがわかってきた。本研究では、この機能を活かす新規放射線・免疫併用療法の開 発を目的に、放射線治療後に血中に産生される癌特異的抗体を利用する免疫細胞移入療法を動物を用いて試みる。

平塚 真弘

■東北大学大学院 薬学研究科 准教授



フッ化ピリミジン系抗がん剤の副作用予測を目指した代謝酵素レアバリアントの網羅的機能解析

5-フルオロウラシル(5-FU)は、多くのがん種の治療に用いられている。しかし、5-FUに由来する重篤な副作用 発現のために治療を中断したり、死亡するケースも少なくない。 本研究では、日本人3554人の全ゲノム解析から 明らかになった5-FU代謝酵素ジヒドロピリミジナーゼ(DPYS)のレアバリアント情報を基に、数十種の組換え酵素 タンパク質を作製し、活性がどの程度変化するかを明らかにする。この研究成果は、副作用の少ない抗がん剤 を選択する際に有用なコンパニオン診断薬の開発にもつながると期待している。

新井 康之

■ 京都大学大学院/米国国立衛生研究所 医学研究科 血液・腫瘍内科 医員



CRISPR/Cas9によるゲノム編集技術を用いた、効果増強型キメラ抗原受容体(CAR)T細胞の開発

CAR-T細胞は近年、がん免疫療法分野において長足の進歩を遂げている。我々は、ゲノム編集技術を用いて、 CAR-T細胞の寿命を延ばすことで、現時点では十分な効果を認めていない固形腫瘍にも有効なCAR-Tの開発 を試みた。CRISPR/Casなどでゲノム編集を行ったところ、T細胞の機能が著明に失われることが判明した。そ のため、T細胞の腫瘍へのホーミングを制御することで、効果増強を目指すことにした。これまでのところ、特定 のケモカイン受容体の強制発現が有効であると判明し、さらに研究を続ける予定である。

野村 基雄

■京都大学附属病院 がん薬物治療科 医員



根治切除不能な粘膜黒色腫に対するImmune -checkpoint inhibitor+radiotherapyの第Ⅱ相臨床試験

研究内容

悪性黒色腫は、日本人では1年間で人口10万人あたり1-2人に発生する。皮膚以外の粘膜から発生する粘膜黒 色腫の発生頻度は、悪性黒色腫全体の10%であり、超希少疾患の1つである。粘膜黒色腫は、皮膚悪性黒色 腫と同じメラノサイト由来の悪性腫瘍であるが、分子生物学的背景や抗programmed death-1抗体であるニボル マブの有効性は異なっている。本研究では、根治切除不能な粘膜黒色腫に対し、ニボルマブ+放射線療法の 有効性と安全性を評価し、粘膜黒色腫に対するより効果の高い治療法の開発を行う。

高橋 真美

■国立がん研究センター研究所 動物実験施設 ユニット長



膵臓がんPDXの同所移植モデルを用いたがん…間質相互作用・脂肪浸潤に関する解析

膵臓がんのリスク要因である肥満・糖尿病・加齢が膵臓における脂肪細胞の浸潤を起こすことに注目し、膵臓 発がんへの関与について検討を行ってきた。 膵臓がんは間質を多く有し、 腫瘍組織中にも脂肪細胞の浸潤が観 察される。 本研究では、 がんの微小環境の解析に適していると考えられる患者由来ゼノグラフト(PDX)の同所 移植モデルを用い、高脂肪食等によって誘導された脂肪浸潤が膵臓がんPDXの増殖・進展に及ぼす影響を解 析し、膵臓がん微小環境における脂肪浸潤の役割について明らかにすることを目指す。

氏 名 所属施設名及び職名

上山 健彦

■神戸大学バイオシグナル総合研究センター 分子薬理分野 准教授



研究課題名

新しい標的分子に着目した神経膠芽腫に対する新規治療薬開発への挑戦とその応用

研究内容

神経膠芽腫(GBM)は脳腫瘍の中で最も悪性度が高い腫瘍で、生存期間中央値は1年~2年である。現在の治療薬は、アルキル化剤と抗VEGF抗体の2剤が中心であるが、有効性には限界があり、新たな治療法・薬の開発が切望されている。本研究は、我々が発見したアストロサイトにおける新たなシグナル経路の臨床への応用を成し遂げるべく、ランダムスクリーニング法を用いて神経膠芽腫の増殖を抑制するシード化合物を得、神経膠芽腫、可能なら他腫瘍にも適応できる新規治療薬開発を目指すというものである。

福島 紘子

■筑波大学 医学医療系 小児科 講師



陽子線治療を受けた小児がん患者の長期予後評価

研究内容

小児がん長期生存率は1950年代の20%から80%台へと躍進し、長期合併症も明らかになってきた。放射線治療は小児固形がんの主要な治療法であるが、陽子線治療は周囲正常組織への不要な照射を減ずることができる。陽子線治療は2016年度に保険収載されたが歴史は浅く、長期予後は不明である。我々の施設では1980年代より陽子線治療を行っており、長期合併症評価を行いたい。長期合併症が不明な時期に診療を受けた生存者もおり、特段健康に気をかけていない人もいる。サバイバーへの長期合併症の啓もう活動、人間ドックや定期健診への促しも行いたい。

伊藤 寛倫

■がん研究会がん研有明病院 肝胆膵外科 医長



胆汁を用いたリキッドバイオプシーの確立と胆管がん術前診断への応用

研究内容

肝外胆管がんの術前組織診断は胆管がん治療のアキレス腱である。早期胆管がんは腫瘤を形成しにくく、胆管の狭窄として発症するため、内視鏡的生検が困難である。現在の術前診断のゴールドスタンダードはERCPによる擦過細胞診、または胆汁細胞診であるが、正診率は生検に比して低い。本研究では、ERCP時に採取する胆汁より癌由来の遊離DNA (ctDNA)を検出、シークエンスすることにより、癌特異的遺伝子変異による胆管がんの確定診断の精度向上を目指す。

山極 洋子

■国立がん研究センター 社会と健康研究センター 予防研究部 特任研究員

非アルコール性脂肪性肝疾患関連指標の妥当性研究



研究課題名 大規模コホート研究における新たな肝がんリスク評価を目指した血液を用いた

研究内容

非アルコール性脂肪性肝疾患はわが国における新たな肝がんのリスクとして対策が求められており、疫学研究で非アルコール性脂肪性肝疾患を把握するために血液を用いた簡便な肝脂肪化指標が必要とされている。CT等の画像データから把握された肝脂肪化を基準として、海外で開発された肝脂肪化指標について、日本人集団における妥当性を明らかにする。さらに、新たな肝がんリスク評価研究へとつながるよう、日本人集団で妥当性が確認された肝脂肪化指標と肝線維化指標と組み合わせて、大規模コホート研究への応用可能性について検討する。

B課題

氏 名 所属施設名及び職名

高山 佳樹

■東北大学病院 放射線部 助手



研究課題名

前立腺がんに対するオンライン適応放射線治療確立に向けた高精度かつ迅速な自動輪郭抽出システムの開発

前立腺癌の放射線治療では治療回毎に標的や危険臓器の位置や形状の変化が大きく、治療開始前の治療計画通 りに治療時に標的や危険臓器に線量が照射されているかは不明で、予期せぬ癌再発や副作用が発生している。こ れに対し、位置照合用CBCTを用いて治療回毎に治療計画を修正し最適な治療計画で照射を行うオンライン適応放 射線治療が開発されているが、課題の一つに迅速で高精度な輪郭作成技術が求められている。本研究では、大規 模な患者データと深層学習を用いて、オンライン適応放射線治療の実現に向けた自動輪郭抽出システムを構築する。

井上 博文

■岡山大学病院 病理部 臨床検査技師



Terahertz chemical microscopeを用いた病理組織検体割面imaging化の基礎的研究 ~遺伝子検査用検体の迅速採取に向けて~

がんゲノム医療における遺伝子検査は病理検査で用いられるFFPEブロックが使用される。しかしその作成工程で は早くても1~2日間と時間を要し、手術材料などの大型の組織になるとさらに増す。また固定の際に使用するホル マリンは核酸に影響を与え、検査精度に大きく影響を与えることも知られている。本研究では未固定状態の組織片を Terahertz chemical microscopeを使用しimaging化を目指すと共に検査に必要な腫瘍細胞量を高感度で計測する 方法の開発を目的としている。がんゲノム医療検査に適した病変部組織を採取できるデバイス開発の基礎研究である。

勝田 義之

■一般財団法人竹田綜合病院 放射線医学物理士



高精度放射線治療における高精度な治療効果予測システムの開発

Intensity-modulated-radiation-therapy (IMRT) では、治療が安全かつ効果的に実施されることをコールドラ ンで評価する。近年、腫瘍組織および正常組織に投与される放射線量を把握してこれを実施する方法が報告 されている。これらの方法では、放射線が腫瘍組織や正常組織に及ぼす生物効果を直接には評価できないた め不十分である。そこで、本研究では生物効果を把握することにより治療開始前に患者予後を予測できるシス テムを開発する。

井上 一雅

■首都大学東京大学院 准教授

Radium-223の合理的な放射線管理を目的とした可搬型α線スペクトロメータの開発と実用化

a線放出核種であるRadium-223が転移性骨腫瘍に対する治療薬として利用が始まり、臨床現場において合理的 な放射線管理が求められている。この背景には、これまでのRI内用療法ではα線放出核種が使用された例がなく、 かつα線は物質に対する透過力が極端に弱いため、その計測および管理が極めて難しいためである。研究では、 現場で実際に管理を行う診療放射線技師が日常業務の中で簡便に使用できる可搬型α線スペクトロメータの開発 をすることが目的である。

松田 和之

■信州大学医学部附属病院 臨床検査部 副臨床検査技師長



遺伝子変異特異的定量PCR法を用いた若年性骨髄単球性白血病に対する分子標的薬効果の検証

本研究では、私たちが樹立した若年性骨髄単球性白血病(JMML)患者由来iPS細胞を用いて、CD34陽性細 胞を分化誘導し、分子標的薬に対するJMML細胞の効果について、遺伝子変異特異的定量PCR法による正確 な抗腫瘍効果の検証を行うことを目的とする。 本研究では安定的にJMML由来血液細胞を使用でき、遺伝子変 異特異的定量PCR法を用いることで直接的にがん細胞の有無・量を確認できるため、本治療モデルの結果は、 臨床応用につながる重要な基礎データになると考えられる。

中山 貴美子

■神戸大学大学院 保健学研究科 准教授



研究課題名

子育で世代のがんサバイバーのエンパワメント過程に関する研究

研究内容

身体的のみならず、心理・社会的にも課題の生じやすい子育て世代のがんサバイバーが、がんに伴う治療や課題に対処し、がんと共に充実した人生を送ることが求められている。そこで、子育て世代のがんサバイバーが、がんによる障害や課題を持ちながらも、自分と家族の健康管理や生活を調整するとともに、家族や周囲の人々との関係性を保ち、がんと共に自分らしく生きていくエンパワメントの過程と影響要因を明らかにする。本過程を明らかにすることで、今後、がんサバイバーのエンパワメントを促進するための支援につなげたい。

大坂 和可子

■東京慈恵会医科大学 医学部 看護学科 成人看護学 講師



研空運顆々

術式選択に悩む乳がん患者と医療者のシェアドディシジョンメイキングを促進する ディシジョンエイドの臨床導入に関する多施設研究

研究内容

乳がん術式選択は、生存率の差がないが、術後のボディイメージやQOLに影響する意思決定の葛藤を伴う難しい選択の1つであり、患者は支援を必要としている。申請者は、患者と医療者のシェアドディシジョンメイキングを促進する意思決定支援ツール(ディシジョンエイド)を開発し、意思決定の葛藤低下に対する効果検証をした。しかしまだ普及には至っていない。本研究は、意思決定支援ツールを導入した意思決定支援を多施設で導入し評価する予定である。選択に悩む乳がん患者の意思決定支援充実への示唆を得たいと考えている。

長谷川 陽子

■東京大学医学部附属病院 病態栄養治療部 管理栄養士



研究課題名

膵癌化学療法患者における栄養状態の動向と化学療法の実績についての現状調査

研究内容

膵がん化学療法中の患者は、食欲不振や膵外分泌能障害に伴う消化吸収障害など、様々な栄養学的問題点を抱えているため、栄養管理の重要性が高まっている。しかし、本邦における膵がん化学療法患者の栄養状態に関する報告はほとんどなく、膵がん化学療法中の患者に対する栄養管理方法も未だ確立されていない。本研究では、膵がん化学療法中の患者の栄養状態の推移を把握し、栄養状態低下を示す患者の特徴および適切な栄養管理の開始時期を検討し、膵がん化学療法中の患者に対する栄養管理プログラムを立案する。

小原

見 ■自治医科大学 看護学部 教授





がん臨床試験における意思決定支援の課題抽出のための尺度開発

研究内容 ※1 歴史の加速ルギザ 集されていている。 女神神 やむへ州ギエなむもぶ)院

がん研究の加速化が推進されている昨今、有効性や安全性が不確実ながん臨床試験への参加あるいは途中中 止を考える患者の意思決定支援は看護師の重要な責務である。しかし看護師が患者の意思決定に十分に関与 できていない現状が報告されていることから、本研究ではがん臨床試験における意思決定支援の課題抽出のた めの尺度を開発して調査を行い、支援の現状と課題を明らかにする。これにより、看護師による支援拡大のため の示唆を得ることができ、がん臨床試験におけるより適切なインフォームドコンセントの実現に貢献できる。

海外派遣研究助成委員会報告

委員長

関谷 剛男

(公益財団法人佐々木研究所 常務理事・研究所長)

1. 海外派遣研究助成事業について

(公財)がん研究振興財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を推奨するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的に、種々の事業を行っています。

本委員会が担当しているのは、研究助成事業の中で行われる「海外派遣研究者への助成事業」です。

がんを専門分野とする医師及び研究者が短期間、海外で研究の発表、協議、施設調査、研究資料の収集等の先進的な研究活動に対して助成を行うものです。

応募の資格は、がんに関する研究又は臨床に従事する医師又は若手研究者で将来指導者として期待され、 所属長からの推薦者となっております。平成29年度の助成金額等は、事業計画の範囲で600万円を限度に1 件20万円以内とし、30名程度の公募を行い、49件の応募がありました。

2. 海外派遣研究助成委員会について

平成29年度の委員会は、3名の委員、亀口政史委員(亀口公認会計士事務所所長)、中川原章委員(佐賀県医療センター好生館理事長)、関谷剛男委員(公益財団法人佐々木研究所所長)で構成されており、49件の申請案件を審査しました。

委員会としての助成決定に当たっては、

- (1) 参加希望学会の重要性を考慮する。
- (2) 同じ学会に参加する申請の場合、口演か、示説かを考慮する。
- (3) 一部の施設への助成に偏らないよう公平性を考慮する。
- (4) 過去に助成を受けた頻度を勘案し、特定個人に偏らないよう公平性を考慮する。
- (5) 本年度も30件の助成を行う。
- (6) 所属長の推薦理由を考慮する。
- (7) 若手医師、研究者への助成の観点から40歳を目途に年齢を考慮する。
- (8) 大学院生等の教育目的の海外派遣は適用外とする。

以上を踏まえ、書面審査を含めて計11回の委員会において、慎重なる審議の結果、27名への助成を決定しました。

3. 平成29年度の海外派遣研究助成

- 1) 15th World Congress of the European Association for Palliative Care(ヨーロッパ緩和医療学会) (マドリード・スペイン) 1 名(示説)
- 2) Digestive Disease Week 2017(米国消化器病週間)(シカゴ・アメリカ) 3名(示説)
- 3) The American Society of Colon and Rectal Surgeons 2017 (米国結腸直腸外科学会) (シアトル・アメリカ) 1名 (示説)
- 4) Baylor University Medical Center (ダラス・アメリカ) 1名

- 5) ESTORO36 (第36回 欧州放射線腫瘍学会) (ウィーン・オーストリア) 1名 (示説)
- 6) エレクタ本社(ロンドン・イギリス) 1名
- 7) 3rd Congress of the European Academy of Neurology(ヨーロッパ神経病理学会) (アムステルダム・オランダ) 1 名(示説)
- 8) 14th International Conference on Malignant Lymphoma (悪性リンパ腫国際会議) (ルガノ・スイス) 1名 (口演)
- 9) American Association of Physicists in Medicine 59th Annual Meeting and Exhibition (米国医学物理学学会) (デンバー・アメリカ) 1名 (口演)
- 10) The 17th International p53 Workshop(p53 国際ワークショップ) (バイオポリス・シンガポール) 1 名(示説)
- 11) 16th Human Proteome Organisation World Congress(世界ヒトプロテオーム会議) (ダブリン・アイルランド) 1 名(示説)
- 12) First World Congress of the International Laparoscopic Liver Society(国際腹腔鏡肝臓外科学会) (パリ・フランス) 1名(口演)
- 13) European Society of Coloproctology 12th Scientific and Annual Meeting(ヨーロッパ大腸肛門病学会) (ベルリン・ドイツ) 2 名(示説)
- 14) American Society of Radiation Oncology 59th Annual Meeting(米国放射線腫瘍学会) (サンディエゴ・アメリカ) 1 名(示説)
- 15) ESMO 2017 Congress (欧州癌治療学会議) (マドリード・スペイン) 1名 (示説)
- 16) International Pancreatobiliary Endoscopy Course (Vallado-LIVE2017) (国際胆膵内視鏡ライブコース・バラドライブ2017) (バリャドリッド・スペイン) 1名 (示説)
- 17) United European Gastroenterology Week2017(欧州消化器病週間) (バルセロナ・スペイン) 1 名(口演)、1 名(示説)
- 18) European Association of Nuclear Medicine Congress2017(欧州核医学会) (ウィーン・オーストリア) 1 名(示説)
- 19) Connective Tissue Oncology Society Annual Meeting 2017(結合組織腫瘍学会) (マウイ・アメリカ) 1 名(示説)
- 20) 13th Asia Pacific Congress of Endoscopic & Laparoscopic surgeons of Asia (第13回アジア内視鏡外科学会)(セブ・フィリピン) 1 名(口演)
- 21) The Society of Thoracic Surgeons(米国胸部外科学会議)(フロリダ・アメリカ) 1 名(口演)
- 22) T-cell lymphoma forum 2018 (T細胞リンパ腫フォーラム2018) (サンディエゴ・アメリカ) 1名 (示説)
- 23) American Society for Pharmacology and Therapeutics Annual Meeting 2018 (アメリカ臨床薬理学会2018) (オーランド・アメリカ) 1名 (口演)
- 24) Americas Hepato-Pancreato-Biliary Association Annual Meeting 2018 (アメリカ肝胆膵外科学会2018) (マイアミ・アメリカ) 2名 (口演)
- 25) 11th European Breast Cancer Conference (第11回欧州乳がん会議) (バルセロナ・スペイン) 1名 (示説)

4. 海外派遣研究助成の成果

海外の学術集会に参加し研究成果を発表することは、医師、研究者等が、そのがん研究の方向性を確認する貴重な機会です。また、世界の動向を直接感知する貴重な機会です。この活動を助成することの意義は、海外学会参加で得たものをがん研究者間で、また本事業に寄付を頂いた方々と研究者との間で分かち合うことにあると考えます。

助成対象者は、帰国後1ヶ月以内に研究成果報告書、その他参考となる資料を当財団に提出することになっています。この報告は財団ホームページで閲覧することが出来ます。

H29 年度海外派遣研究助成金採択者

		4-		13 1 - W A FE E 21	F- 4111 :
	氏	名	所属機関	参加学会等名称	開催地
1	石木	寛人	国立がん研究センター 中央病院	15th World Congress of the European Association for Palliative Care (ヨーロッパ緩和医療学会)	マドリード (スペイン)
2	居軒	和也	国立がん研究センター 中央病院	Digestive Disease Week 2017(米国消化器病週間)	シカゴ (アメリカ)
3	戸田	孝祐	京都大学医学部附属病院	① The American Society of Colon and Rectal Surgeons 2017 (米国結腸直腸外科学会) ② Baylor University Medical Center ベイラー大学医療センター	①シアトル (アメリカ) ②ダラス (アメリカ)
4	武田	一也	東北大学大学院 医学系研究科	① ESTORO36 (第 36 回 欧州放射線腫瘍学会) ②エレクタ本社	①ウィーン (オーストリア) ②ロンドン (イギリス)
5	中田	聡	群馬大学大学院 医学系研究科	3rd Congress of the European Academy of Neurology (ヨーロッパ神経病理学会)	アムステルダム (オランダ)
6	中谷	行宏	国立がん研究センター 中央病院	Digestive Disease Week 2017 (米国消化器関連学会週間)	シカゴ (アメリカ)
7	河本	啓介	久留米大学医学部	14th International Conference on Malignant Lymphoma (悪性リンパ腫国際会議)	ルガノ (スイス)
8	松山	眞人	がん研究会有明病院	Digestive Disease Week 2017 (米国消化器関連学会週間)	シカゴ (アメリカ)
9	陣野	隼汰	国立がん研究センター 先端医療開発センター	American Association of Physicists in Medicine 59th Annual Meeting and Exhibition (米国医学物理学学会)	デンバー (アメリカ)
10	山野荘	太郎	国立がん研究センター 研究所	The 17th International p53 Workshop (p53 国際ワークショップ)	バイオポリス (シンガポール)
11	喬	志偉	国立がん研究センター 研究所	16th Human Proteome Organisation World Congress (世界ヒトプロテオーム会議)	ダブリン (アイルランド)
12	小木曾	部	名古屋大学 医学部附属病院	First World Congress of the International Laparoscopic Liver Society(国際腹腔鏡肝臓外科学会)	パリ(フランス)
13	松永	理絵	福島県立医科大学	European Society of Coloproctology 12th Scientific and Annual Meeting(ヨーロッパ大腸肛門病学会)	ベルリン (ドイツ)
14	牧田智	灣子	愛知県がんセンター 中央病院	American Society of Radiation Oncology 59th Annual Meeting (米国放射線腫瘍学会)	サンディエゴ (アメリカ)
15	横田	満	倉敷中央病院	European Society of Coloproctology 12th Scientific and Annual Meeting(ヨーロッパ大腸肛門病学会)	ベルリン (ドイツ)
16	久保	絵美	国立がん研究センター 研究所	ESMO 2017 Congress (欧州癌治療学会議)	マドリード (スペイン)
17	高原	楠昊	東京大学医学部附属病院	① International Pancreatobiliary Endoscopy Course(Vallado-LIVE2017) (国際胆膵内視鏡ライブコース・バラドライブ 2017) ② United European Gastroenterology Week2017 (欧州消化器病週間)	①バリャドリッド (スペイン) ②バルセロナ (スペイン)
18	中本	隆介	京都大学大学院	European Association of Nuclear Medicine Congress2017 (欧州核医学会)	ウィーン (オーストリア)
19	山階	武	大阪赤十字病院	United European Gastroenterology Week2017 (欧州消化器病週間)	バルセロナ (スペイン)
20	渡邊	翔	国立がん研究センター 中央病院	Connective Tissue Oncology Society Annual Meeting 2017 (結合組織腫瘍学会)	マウイ (アメリカ)
21	林	憲吾	厚生連高岡病院	13th Asia Pacific Congress of Endoscopic & Laparoscopic surgeons of Asia (第 13 回アジア内視鏡外科学会)	セブ (フィリピン)
22	服部	有俊	順天堂大学 医学部附属順天堂医院	The Society of Thoracic Surgeons (米国胸部外科学会議)	フロリダ (アメリカ)
23	森近	一穂	琉球大学大学院 医学研究科	T-cell lymphoma forum 2018 (T 細胞リンパ腫フォーラム 2018)	サンディエゴ (アメリカ)
24	松金	良祐	国立がん研究センター 研究所	American Society for Pharmacology and Therapeutics Annual Meeting 2018(アメリカ臨床薬理学会 2018)	オーランド (アメリカ)
25	渡邉	元己	がん研究会有明病院	Americas Hepato-Pncreato-Biliary Association Annual Meeting 2018 (アメリカ肝胆膵外科学会 2018)	マイアミ (アメリカ)
26	大庭	篤志	がん研究会有明病院	Americas Hepato-Pancreato-Biliary Association Annual Meeting 2018 (アメリカ肝胆膵外科学会 2018)	マイアミ (アメリカ)
27	平田	泰三	呉医療センター・ 中国がんセンター	11th European Breast Cancer Conference (第 11 回欧州乳がん会議)	バルセロナ (スペイン)

氏 名

所属施設名及び職名

石木 寛人

■国立がんセンター中央病院 緩和医療科 医員



派遣先/渡航期間

15th World Congress of the European Association for Palliative Care ヨーロッパ緩和医療学会(マドリッド、スペイン)/2017.5.17~5.22

「皮膚自壊腫瘍による症状緩和のためのモーズ法の応用-パイロットスタディ-」という演題で示説発表 を行った。モーズ法は塩化亜鉛を含む軟膏を病変に塗布し、病変を固定して皮膚癌を治療する方法で、 これを応用して皮膚自壊腫瘍からの出血、浸出液をコントロールする効果を前向きに調べた。皮膚自 壊腫瘍に伴う出血または浸出液を有する患者を対象とし、モーズ法を実施した5例16回の効果と安全性 を検討した。皮膚自壊腫瘍を有する患者に対してモーズ法は安全に実施され、出血の制御には有効だが、 浸出液の制御は困難であると考えられた。

居軒 和也

■国立がんセンター中央病院 内視鏡科



派遣先/渡航期間

Digestive Disease Week 2017 米国消化器病週間 (シカゴ、アメリカ) / 2017.5.4 ~ 5.10

同種造血幹細胞移植(allogeneic hematopoietic stem cell transplantation: allo-SCT)後に消化器症状が出 現した際のカプセル内視鏡(capsule endoscopy: CE)を用いた小腸観察の有用性について発表した。小 腸CEで炎症を認めた症例では、炎症を認めかなった症例と比べ、移植関連死亡が多い傾向にあること を示した。allo-SCT後の小腸CEの有用性に関して海外の先生方と議論を行い、今後の研究の参考とす ることが出来た。

戸田 孝祐

■京都大学医学部附属病院 消化管外科



- 1) The American Society of Colon and Rectal Surgeons 2017 米国結腸直腸外科学会(シアトル、アメリカ)/2017.6.10~6.14
- ②Baylor University Medical Center ベイラー大学医療センター(ダラス、アメリカ)/2017.6.15~6.17

研究内容

2017年にシアトルで行われた米国大腸直腸外科学会で、基礎研究分野としてKRAS遺伝子変異を伴う 大腸癌に対してアミノ酸代謝の枯渇療法を利用した新規治療法をポスター (口頭発表)で報告した。他 の演者からも複数の質問もあり、抗EGFR抗体薬に抵抗性があるKRAS遺伝子型大腸癌に対する新規治 療法開発に関心が高いことがうかがわれた。また、ポスターセッションにおける基礎研究部門の主席 演者として賞もいただき、この研究領域の今後の発展の可能性について感じることができ非常に有意 義な報告であった。

- 田5 -抽

東北大学大学院医学系研究科 医科学専攻放射線腫瘍学講座 大学院生



派遣先/渡航期間

- ①ESTORO36 (ウィーン、オーストリア) / 2017.5.4 ~ 5.9 第36回欧州放射線腫瘍学会
- ②エレクタ本社(ロンドン、イギリス) / 2017.5.10 ~ 5.11

研究内容

ポスターセッションにて、早期肺癌に対する定位放射線治療における治療前PET画像の定量解析(テク スチャ解析)の有用性を報告した。テクスチャ解析は発展途上の比較的新しい研究領域であり、ディス カッションや他演者の発表を通じて研究の視野を広げる事ができ、その後の論文作成の糧とすること ができた。その後、今後臨床導入が期待されているMRIリニアックを開発・製造するエレクタ社の英 国本社及び工場を訪問し、装置の性能やテクスチャ解析への応用の可能性などについて有用な議論を 行うことができた。

中田 舩

群馬大学大学院医学系研究科 脳神経外科学 大学院生



派遣先/渡航期間

3rd Congress of the European Academy of Neurology ヨーロッパ神経病理学会 (アムステルダム、オランダ) / 2017.6.21 ~ 6.28

トルコ鞍部発生Atypical teratoid/rhabdoid tumor (AT/RT)の臨床病理学的、分子遺伝学的解析の成 果を報告した。AT/RTは主に乳幼児の後頭蓋窩に好発する悪性胎児性腫瘍だが、同様の悪性腫瘍が成 人のトルコ鞍部にもごく稀に発生することが知られており、今回世界で初めて、シリーズとしての検 討を行った。出席者の関心は高く、活発な議論を行うことができた。私にとっては初めての国際学会 での発表であり、今後この経験を大いに生かしていきたいと考えている。

河本 啓介

■新潟大学医歯学総合病院高密度無菌治療部・助教



派遣先/渡航期間

14th International Conference on Malignant Lymphoma 悪性リンパ腫国際会議(ルガノ、スイス)/2017.6.13~6.19

慢性活動性EBウイルス感染症(CAEBV)は稀な疾患ではあるがアジア地域に好発し小児・若年成人発 症のCAEBVはWHO分類において一つの疾患単位として認識されている。しかし中年・高齢者の新規 発症例も日本の血液内科における日常臨床で散見されるも、その存在については世界的にはあまり認 識されておらず、かつWHO分類における疾患単位としても確立されていない。今回我々はWHO分類 における新規疾患概念確立のため、成人発症のCAEB54例についての臨床病理学的検討を口演発表し、 有意義な議論をすることができた。

松山 眞人

■がん研究会有明病院 消化器内科肝胆膵内科 副医長



派遣先/渡航期間

Digestive Disease Week 2017 米国消化器病週間(シカゴ、アメリカ) / 2017.5.6~5.10

Digestive Disease Week 2017 米国消化器関連学会週間で、悪性肝門部胆道閉塞に対する術前ドレナー ジの現状と、その安全性・有効性に対し検討し報告した。

肝門部悪性胆道閉塞の術前ドレナージでは、経鼻胆道ドレナージで短期間でのRe-interventionが増え たものの、内外瘻による成績の有意な違いは認めなかった。また予定外処置が31%にみられ、術前肝 門部悪性狭窄の予後との関連がみられた。

悪性肝門部胆道閉塞の多施設共同研究発表は少なく、有意義な報告が行えたと感じた。また胆道ドレ ナージ全般に対する国外の知見を得ることができ、有意義であった。

陣野 隼汰

■国立がん研究センター先端医療開発センター 粒子線医学開発分野 特任研究員



派遣先/渡航期間

American Association of Physicists in Medicine 59th Annual Meeting and Exhibition 米国医学物理学学会(デンバー、アメリカ)/ 2017.7.28 ~ 8.5

アメリカ医学物理学会にて、不均質媒体による側方散乱を考慮した新たなClarkson法を用いた独立計 算検証における多施設試験について発表を行った。従来のClarkson法では不均質物質における側方散 乱の影響を考慮することが不可能であったが、その従来の原理を利用した不均質物質を考慮した新た な方法を提案した。さらにその方法を用いることで、許容値を照射方法や照射部位によって変更する ことなく、従来のシンプルな許容値の運用が可能となることが示した。

所属施設名及び職名 氏 名

山野 荘太郎

■国立がん研究センター研究所 基礎腫瘍学ユニット シニアリサーチフェロー



派遣先/渡航期間

The 17th International p53 Workshop p53国際ワークショップ (バイオポリス、シンガポール) / 2017.7.7~7.13

本財団の助成により、シンガポールのバイオポリスで開催された第17回国際p53ワークショップに参加 し、ポスター発表を行った。本ワークショップは、世界的に著名な、及び新進気鋭なp53研究者が一堂 に会する唯一の国際ワークショップである。

研究成果を本ワークショップで発表し、世界的に著名なp53研究者に我々のデータを見ていただくだけ でなく、質疑応答を介して議論できるまたとない機会となった。今回の経験を通じて自身が着手する 研究を介し、がん医療に貢献できるようさらなる研鑽を続けたい。

志偉 喬

■国立がん研究センター研究所 希少がん研究分野



派遣先/渡航期間

16th Human Proteome Organisation World Congress 世界ヒトプロテオーム会議(ダブリン、アイルランド)/2017.9.16~9.23

ダブリンで開催された第16回のHUPOにて、Proteomics identified predictive biomarkers for response to treatment with pazopanib in sarcomaについて発表した。大会は最新のプロテオミクス技術の開発、バイ オインフォマティクス、タンパク質の翻訳後修飾 、プロテオミクスの創薬への応用、precision medicine など様々な分野の企画があり、同じ分野の研究者と深く議論を行うことができた。今後の研究の推進や 論文作成に大いに参考になった。

小木曾 聡

■名古屋大学医学部附属病院 移植外科 助教



First World Congress of the International Laparoscopic Liver Society 国際腹腔鏡肝臓外科学会(パリ、フランス)/2017.7.5~7.9

パリで行われた第一回の国際腹腔鏡肝臓外科学会において、肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術とラ ジオ波焼灼術の治療成績を比較・提示し、腹腔鏡下肝切除術の利点と欠点、および肝細胞癌治療にお けるその役割について議論を行った。今後の腹腔鏡下肝切除術の技術的な発展と適応拡大、安全性向 上を目指した手技の標準化と普及、さらには腫瘍学的なメリットについて、当該分野における海外の 一流施設の研究者と議論を深めることが出来た。

松永 理絵

■福島県立医科大学 低侵襲腫瘍制御学講座 非常勤講師



European Society of Coloproctology 12th Scientific and Annual Meeting ヨーロッパ大腸肛門病学会(ベルリン、ドイツ)/2017.9.19~9.24

平成29年度がん研究振興財団海外派遣研究助成をいただき、9月19日から24日までドイツ・ベルリンで 開催されたヨーロッパ大腸肛門病学会に参加してまいりました。ヨーロッパを中心に世界中の大腸外 科医が集まる学会であり、著名な医師らの発表や熱い討論は非常に刺激的でした。世界中で進行中の 臨床試験、新治療法など、日本では着想し得ないアイディアに触れることができ、世界の広さを痛感 する機会となりました。今回学んだことを今後の日常診療、臨床研究に活かしていきたいと考えます。

所属施設名及び職名 氏 名

牧田 智誉子

■愛知県がんセンター中央病院 放射線治療部 医長



派遣先/渡航期間

American Society of Radiation Oncology 59th Annual Meeting 米国放射線腫瘍学会 (サンディエゴ、アメリカ) / 2017.9.23 ~ 9.29

頭頸部扁平上皮癌の根治切除術症例における術後放射線治療において、ハイリスク領域に限局した照 射法と、全頸部に行う照射法の2つの治療方針で行われた治療成績と有害事象について、傾向スコアを 用いて比較検討した研究成果について報告した。術後照射の最適な治療法についてフロアの参加者と 議論し、最新の知見や臨床研究の結果について意見交換したことは、大変有意義であった。研究成果 は帰国後、論文化した(Jpn J Clin Oncol. 2017 Dec 1;47(12):1141-50)。

横田 満 ■公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院 外科 医長



派遣先/渡航期間

European Society of Coloproctology 12th Scientific and Annual Meeting ヨーロッパ大腸肛門病学会(ベルリン、ドイツ)/2017.9.18~9.24

直腸癌術後の排便機能低下はQOLに影響を及ぼしうる問題であり、とくに高齢者では生理的な機能低 下により非高齢者に比べその影響が強くなる可能性がある。今回、低位前方切除術を受け長期生存を えた75歳以上の高齢患者を対象とした術後アンケート調査の結果を発表した。高齢患者の肛門機能ス コア、QOLスコアは非高齢者と比較し劣るものではなく、許容されるものであった。今後の直腸癌高 齢患者における適切な術式選択を考える上でも大変有意義な発表であった。

久保 絵美

国立がん研究センター研究所 エビゲノム解析分野 特任研究員



ESMO 2017 Congress 欧州癌治療学会議(マドリード、スペイン)/2017.9.6~9.14

欧州癌治療学会議で、演題名Increased mutation burden in high-risk lung tissues: toward precision cancer risk diagnosisで発表し、討論することができました。この研究成果は、高発がんリスクの正常 肺組織には、タバコ喫煙への曝露により突然変異が蓄積していることを初めて示したものであり、精 密ながんリスク診断への新規のアプローチにつながると考えます。また、今後の肺がんの基礎研究に 有用な情報も収集することができました。このような素晴らしい機会を頂きましたことを、心より御 礼申し上げます。

高原 楠昊

■東京大学医学部附属病院 消化器内科 助教



派遣先/渡航期間

①International Pancreatobiliary Endoscopy Course(Vallado-LIVE2017) 国際胆膵内視鏡ライブコース・バラドライブ (バリャドリッド、スペイン) / 2017.10.24 ~ 10.27 2 United European Gastroenterology Week 2017 欧州消化器病週間 (バルセロナ、スペイン) / 2017.10.28 ~ 11.3

International Pancreatobiliary Live Endoscopy Courseにて参加者との議論により海外と我が国との胆 膵内視鏡診療に対する考え方の違いを理解することができた。また25th UEG Week Barcelona 2017で、 切除不能・術後再発胆道癌に対する化学療法施行例においてCA19-9は全生存期間および無増悪生存期 間に対する予後因子であり、治療に伴うCA19-9の反応性は画像による抗腫瘍効果の判定に補完的な役 割を果たしうることを報告した。

氏 名 所属施設名及び職名

中本 隆介

■京都大学大学院 医学研究科放射線医学講座



派遣先/渡航期間

European Association of Nuclear Medicine Congress2017 欧州核医学会 (ウィーン、オーストリア) / 2017.10.20 ~ 10.26

研究内容

妊孕性の温存を検討する上で、卵巣に病変が限局するFIGO分類I期の境界悪性卵巣腫瘍と卵巣癌を術前に正確に鑑別することは重要である。過去の報告とは違って、PET/CTによるFIGO分類I期の境界悪性卵巣腫瘍と卵巣癌の鑑別は容易ではないことが本研究を通じて明らかになったので、国際学会にて発表した。また本研究を通じて境界悪性類内膜腫瘍とseromucinous borderline tumorという比較的稀な境界悪性腫瘍のPET/CTに関する知見を得たので、併せて発表した。

山階 武 ■大坂赤十字病院 消化器内科部



派遣先/渡航期間

United European Gastroenterology Week2017 (欧州消化器病週間) (バルセロナ、スペイン) / 2017.10.29 ~ 11.3

研究内容

Balloon-assistを用いたESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)(BAESD)の右側結腸内視鏡困難症例に対する有用性についての報告を内視鏡治療後の遺残に関するシンポジウムで発表した。大腸腫瘍に対するESDは広く行われているものの手技の難易度は高く、特に右側結腸では内視鏡を深部にまで挿入する必要があり、内視鏡の操作性がより困難となり、ESDの難易度が上がる。そこでBAESDの安全性と有効性を示し、困難症例も克服できることを報告した。

発表後に参加者より様々な賞賛を頂き、BAEを併用することの有用性に対して十分に理解が得られたと思われた。

渡邊 翔 ■国立がん研究センター中央病院 乳腺腫瘍内科 レジデント



派遣先/渡航期間

Connective Tissue Oncology Society Annual Meeting 2017 結合組織腫瘍学会(マウイ、アメリカ) / 2017.11.7 ~ 11.13

研究内容

個別化治療のない切除不能・再発軟部肉腫に対してドキソルビシン(DXR)が標準的に使用されるが、有効性は乏しく、全例で増悪する。二次治療は確立されておらず、DXR耐性軟部肉腫の正確な予後は不明である。我々は、DXR開始後に腫瘍増大を認めた時点での患者背景から予後予測モデルを導出し、DXR耐性後の生存期間が全生存期間と相関することを示した。この結果は、治験登録を含めた二次治療の適切な症例選択およびタイミングの判断に際して参考になると思われる。今後は、会場での討議内容を踏まえ、より正確な予測モデルを確立していきたい。

林 憲吾 ■厚生連高岡病院 外科



派遣先/渡航期間

13th Asia Pacific Congress of Endoscopic & Laparoscopic surgeons of Asia 第13回アジア内視鏡外科学会(セブ、フィリピン) / 2017.11.15 ~ 11.19

研究内容

JCOG0212の結果を受け全国的に側方郭清術は普及してきており、腹腔鏡下における同手術のエビデンスが今後必要である。今回、Clinical feasibility and oncological outcomes of laparoscopic lateral pelvic lymph nodes dissection for advanced lower rectal cancerのタイトルで2施設での腹腔鏡下側方郭清術の成績を報告した。国内での発表とは異なった視点からの質問を受け、腹腔鏡下側方郭清術の有用性や今後の課題などについて積極的な議論が行われ、非常に意義深い発表だったと考える。

氏 名

所属施設名及び職名

服部 有俊

■順天堂大学医学部附属順天堂医院 呼吸器内科 助教



派遣先/渡航期間

The Society of Thoracic Surgeons 米国胸部外科学会議 (フロリダ、アメリカ) / 2018.1.28 ~ 2.1

肺門縦隔リンパ節を含む系統的リンパ節郭清が原発性肺癌における世界的標準リンパ節郭清術式であ るが、リンパ節転移頻度が低く外科切除成績が極めて良好なpart-solid lung cancerに対しリンパ節郭 清範囲が与える予後への影響について、Propensity-score解析を用いた検討結果を第54回米国胸部外科 学会議で報告した。胸部外科学において非常にインパクトの高い同学会における報告であり、胸部CT 画像に基づく新たな至適リンパ節郭清範囲の提唱として、とても意義があったと考えている。

·練 森近:

■ 琉球大学大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病 内科学講座 大学院生



派遣先/渡航期間

T-cell lymphoma forum 2018 T細胞リンパ腫フォーラム2018 (サンディエゴ、アメリカ) / 2018.2.1 ~ 2.5

近年、成人T細胞性白血病(ATLL)のゲノム異常の解明が進んでいる。この中でも、STAT3遺伝子変 異はATLL腫瘍細胞で高頻度に見出され、発症メカニズムの1つである可能性があるが、詳細は不明 である。我々はSTAT3異常と免疫化学染色を利用したJAK-STAT経路の活性化状態および臨床所見と の関連性を解析し、ATLLリンパ腫型がJAK-STAT3経路に依存しない発がん機構を持つ可能性を発表 した。国内外の研究者と積極的な討論が行われ、特に化学療法に対する病型での奏効率の違いと我々 の結果との共通性について深い議論を交わした。今後の研究に大きな知見を得ることが出来た。

松金 良祐

■国立がん研究センター研究所 分子薬理研究分野 特任研究補助員



派遣先/渡航期間

American Society for Pharmacology and Therapeutics Annual Meeting 2018 アメリカ臨床薬理学会2018 (オーランド、アメリカ) / 2018.3.20 ~ 3.26

ポスターセッション及び口頭演題にて、抗体医薬であるトラスツズマブの腫瘍内薬物動態を、可視化・定量 化する新規薬物イメージング法を発表した。現状では、抗体医薬の血液中から固形腫瘍への移行・分布過程 は十分な研究がなされておらず、それらを制御する因子や治療抵抗性との関係も不明である。PID (Phosphor Integrated Dots)と呼ばれる蛍光色素集積体を用いた免疫染色法による薬物イメージング法は、非臨床での 抗体医薬の開発や、薬物デリバリーと治療抵抗性との関係性の追求に有用であることを提案した。

渡邉 元己

■がん研究会有明病院 消化器センター 医員



派遣先/渡航期間

Americas Hepato-Pancreato-Biliary Association Annual Meeting 2018 アメリカ肝胆膵外科学会2018(マイアミ、アメリカ)/ 2018.3.7 ~ 3.13

ポスターセッションにて、当院が行っている膵体尾部癌に対する膵体尾部切除術 (radical antegrade modular pancreatosplenectomy: RAMPS)の短期・長期成績を発表した。RAMPS後の長期成績に関す る報告は症例数が限られている。当院では183例ものRAMPSを経験している。それらは既報よりも腫 瘍サイズ、リンパ節転移、周囲の臓器浸潤が進んだものが多かったが、当院の他臓器合併切除を伴う 積極的切除により短期成績も許容出来、かつ既報と同等の予後を得ていることを発表出来た。また、 自分の発表以外にも、肝胆膵外科に関する様々な知見を得る事が出来た。

大庭 篤志

■がん研究会有明病院 肝胆膵外科 医員



派遣先/渡航期間

Americas Hepato-Pancreato-Biliary Association Annual Meeting 2018 アメリカ肝胆膵外科学会2018 (マイアミ、アメリカ) / 2018.3.7 ~ 3.13

膵体部進行癌の根治には腹腔動脈幹合併膵体尾部切除術(DP-CAR)が不可欠であるが、虚血性合併症 が大きな問題であった。虚血性合併症を回避する目的で当施設で導入した左胃動脈(LGA)血行の再建 /温存を伴うDP-CAR が、根治性と安全性を担保した治療法であるとの研究結果を報告した。DP-CAR は諸外国では確立していないアグレッシブな術式であり、症例の適応、術式の留意点、化学療法の組 み合わせについての議論が行われた。膵体部進行癌に対する治療成績の改善に向けて、自分自身とし ても意義深い発表であった。

平田 泰三

■呉医療センター・中国がんセンター 腫瘍内科 科長



11th European Breast Cancer Conference 第11回欧州乳がん会議(バルセロナ、スペイン) / 2018.3.20 ~ 3.24

研究内容

乳癌に対するドセタキセルの世界標準最大用量である100mg/m²の薬事承認を日本でも取得する目的で 今回、我々は医師主導治験を実施した。今回の試験の結果では、日本人においてドセタキセル100mg/ m²は有望な効果が期待されること、国内で使用可能な支持療法により忍容性があると判断される、薬 物動態が過去の報告と同様であったことを発表した。支持療法の国内外差を含め安全対策について積 極的な議論を行うことができたことで、本治験の結果で適応拡大がなされた場合に、日常診療で行う べき安全対策の情報を入手することができた。

看護師·薬剤師·技師等海外研修選考委員会報告

委 員

桑原 節子

(淑徳大学看護栄養学部 教授)

がん医療は大きな変革の時を迎えている。がんの診断・治療には、重厚な放射線診断、治療機器の他、内 視鏡手術やロボット支援手術の導入も進んでいる。また、がん研究の成果に基づき、がんの病態の解明が進 み、個々の患者について細胞がん化のパスウェイが明らかにされ、その情報に基づく分子標的治療も進化し ている。一方で、がん対策基本法、がん対策推進計画の前後で患者・家族の悩みや負担についての全国調査 を行った結果では、がんの薬物療法に関わる悩みや負担が顕著に増加していた。手術治療や放射線治療が、 それぞれ縮小手術やピンポイント照射を目指しているなかで、薬物療法は、術後補助薬物療法が一般的にな り、医療現場が十分には熟知していない分子標的薬が増え、多くの患者が通院で薬物療法を受けるという状 況が生まれているためと考えられる。従って、がん薬物療法の副作用軽減のための支持療法の普及も現代の がん医療にとっての急務の課題である。

このような状況に対応するためには、がんという病変を治療するとともに、患者・家族の心のケアや暮らしにまで配慮しながら治療にあたるという社会学的な全人的医療が重要となる。そこでその両者を実現するためには、基礎医学者や臨床医とともに、治療や心のケアや暮らしの支援を担当する様々な職種の協働作業を実践するための多職種チーム医療が一つの解決策となる。

しかるに、我が国では、がん医療に習熟した医師以外の医療スタッフが不足している。具体的には、看護師・薬剤師・検査技師・リハビリテーション技師・臨床心理士・栄養士・ソーシャルワーカーなどである。 医師のレジデント制度や研修制度によって、がん医療に習熟した医師の育成は何十年も前から試みられ、一定の成果を上げているが、医師以外の職種についての養成プログラムはあまり手がつけられてこなかった。

がん研究振興財団では、がん医療に携わる基礎医学者や医師以外の医療スタッフを対象とした看護師・薬 剤師・技師等海外研修制度を運用してきた。

2017年度には、計10名が本プログラムによって海外研修を受けた。10名の職種は、診療放射線技師が5名、看護師が2名、理学療法士が2名、薬剤師が1名で、所属は、兵庫医大病院が2名、九州医療センター、国立がん研究センター東病院、愛知県がんセンター中央病院、埼玉県済生会川口総合病院、東海大学、金沢大学大学院、首都大学東京、NPO法人JORTCが各1名であった。主な研修先はアメリカが5名、イギリスが2名、タイ、スペイン、ドイツが各1名であり、著名な医療機関での研修と関連学会への出席というスケジュールが一般的で、研修期間は5日から2週間程度であった。こうした研修報告の一部は、財団ホームページ及び機関誌「加仁」にも寄稿されており、海外施設での研修を通して、自らの能力を高め、所属施設のレベル向上に役立てている様子が見て取れる。

現在の助成制度は年間約10名を公募し、公募要項は財団のホームページで入手可能である。助成対象者に対しては、所属長の推薦が必要で研修に必要な語学力を有し、研修先からの招聘状があることなどといった 条件が付されている。委員会では応募書類について審議し、助成の可否を決定しているが、現在の委員は別表の4名で構成されている。

本事業の課題は、全国的な周知が十分ではなく、また研修希望があったとしても、所属医療機関が忙しい日常診療の間を縫って職員に海外研修を受けさせることが容易ではない点である。しかし、昨今のがん医療における大きな変革の中で、医療機関の意識変革も進み、がん医療における多職種チーム医療の重要性が認

識されるようになった。その中で、すべての職種を対象に海外研修を支援する助成制度は国内には例がなく、 また規模的にも本制度が最大である。今後、本助成制度がより広く活用され、一人でも多くのがん医療に習 熟した医療スタッフが養成されることを期待したい。

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会

		氏 名	所 属
委	員	飯野 京子	国立看護大学校看護学部 教授
委	員	桑原 節子	淑徳大学 看護栄養学部栄養学科 教授
委	員	高橋 朗	国立研究開発法人国立長寿医療研究センター薬剤部長
委	員	堀口 弘	国立研究開発法人国立成育医療研究センター 放射線診療部 診療放射線技師長

H29 年度コメディカル海外研修助成金採択者

NO	部門	氏名	所属機関	研修施設・国際会議等	研修国・都市
1	放	石川 幸江	国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院	Imperial Healthcare NHS Trust, Radiological sciences Unit, Charing Cross Hospital	イギリス・ロンドン
2	放	藤田 幸男	東海大学	American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting	アメリカ・デンバー
3	理	曽田幸一朗	兵庫医科大学病院	WCPT-AWP&PTAT Congress 2017	タイ・バンコク
4	薬	林 稔展	国立病院機構 九州医療センター	The ESMO 19th World Congress on Gastrointestinal Cancer	スペイン・バルセロナ
5	看	中島由加里	金沢大学大学院	The University of Nottingham	イギリス・ノッティンガム
6	放	西山史朗	埼玉県済生会川口総合病院	American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting	アメリカ・デンバー
7	放	清水 秀年	愛知県がんセンター 中央病院	American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting	アメリカ・デンバー
8	理	若杉 樹史	兵庫医科大学病院	The 45.Annual Meeting of the International Society on Oxygen Transport to Tissue (ISOTT2017)	ドイツ・ハレ
9	看	藤原 紀子	特定非営利活動法人 JORTC	 International Association of Clinical Research Nurses Conference Howard University • Georgetown University Medical Center 	アメリカ・プロビデンスおよびワシントン
10	放	大鷹 豊	首都大学東京	2017 IEEE Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference	アメリカ・アトランタ

所属施設名及び職名 氏 名

石川 幸江

■国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院 放射線技術部 放射線診断技術室 主任



Imperial Healthcare NHS Trust, Radiological sciences Unit, Charing Cross Hospital (ロンドン、イギリス) / 2017.6.11~6.24

トモシンセシス機能を含む乳房撮影装置および画像表示装置の品質管理法について実践的に学んだ。 英国では医学物理士が各々高い専門性を持って品質管理を専属で行っていた。研修施設ではEUREFおよび 所属病院NHSの定めた、トモシンセシス専用のテストプロトコルに従って測定および解析を行っていた。平均乳 腺線量の測定ではトモシンセシス撮影時の管球振り角は装置メーカによって異なるためメーカ別に適切な測定方 法が存在していた。日本にはない先進的なトモシンセシス品質管理技術を習得出来、大変有益な研修となった。

藤田 幸男

■東海大学 医学部専門診療学系 放射線治療科学 講師 医学物理士



American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting (デンバー、アメリカ) / 2017.7.29~8.5

米国カリフォルニア大学デービス校との共同研究で開発を行っている「汎用CT装置を用いた新たな肺機能イメー ジング技術」についての研究成果を学術大会に参加し、口頭発表を行った。この技術は、放射線治療計画で 使用される汎用CT装置と画像処理技術のみを使用した手法であり、どこの放射線治療施設でも実現することが 可能であるという大きな利点がある。発表では座長やその他の研究者から積極的に質問やコメントを頂き、今後 の研究推進のために重要な知見を得ることができた。今回の経験を今後の研究や診療に活かしたい。

曽田 幸一朗

■兵庫医科大学病院 リハビリテーション部 理学療法士



WCPT-AWP&PTAT Congress 2017 (バンコク、タイ) / 2017.6.26 ~ 7.1

研修施設等/渡航期間

今回、助成を受けてWCPT-AWP&PTAT2017において「Effectiveness of balance exercise assist robot (BEAR) for allogeneic hematopoietic stem cell transplantation patients: a preliminary study」というテーマでポスター発表を行った。この研究では、 造血幹細胞移植後患者が呈するバランス機能障害に対するロボットリハビリテーションの効果を示した研究であり、日本からの参加者 だけでなく、ニュージーランドからの参加者などから興味をもっていただいた。様々な地域の方とディスカッションする中で、がんサバイ バーに対するリハビリテーションはADLの維持・向上だけでなく、効率良くその能力を改善させる必要性があると感じた。

林 稔展

国立病院機構九州医療センター 薬剤部 副薬剤部長



The ESMO 19th World Congress on Gastrointestinal Cancer (バルセロナ、スペイン) / 2017.6.27~7.3

「軽度催吐リスク化学療法に対する制吐療法の多施設共同前向き観察研究」の演題でポスター発表を行った。 国立病院機構九州グループの薬剤師による多施設共同前向き観察研究であり、軽度催吐リスク化学療法におけ る遅発期悪心嘔吐発現のリスク因子を明らかにし、急性期悪心嘔吐を発症した患者に対する新たな遅発期悪 心嘔吐対策の提案について報告した。海外の研究者とディスカッションし、がん薬物療法の最新情報や趨勢を 把握することでき、今後につながる非常に有意義な学会参加であった。

中島 由加里

■金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科保健学専攻 博士後期課程3年・特別研究員DC



The University of Nottingham (ノッティンガム、イギリス) / 2017.9.3 ~ 9.10

研修施設等/渡航期間

Nottingham大学にて開催されたサマースクールに1週間参加した。主にリンパ浮腫に関する講義やケア方法を 学んだ。自身の研究発表も行い、リンパ浮腫を専門とする研究者との意見交換ができ、貴重な機会となった。こ の研修の目的には、若手研究者の育成も含まれており、同世代の研究者とも交流が持て、多くの刺激を受けた。 研修へ参加し、今後の研究へのモチベーションが向上したと共に、日本の看護を支える研究者として、今後も 成長していきたいと改めて実感することができた。支援を頂きました財団皆様に深く御礼申し上げます。

西山 史朗

■埼玉県済生会川口総合病院 放射線技術科 診療放射線技師



研修施設等/渡航期間

American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting (デンバー、アメリカ) / 2017.7.28~8.5

2017年米国物理学会にてディスカッションが義務付けられている電子ポスターセッションにて下記に示す発表を 行った。発表時間は7~8分、その後30分の討論で、聴講者とのディスカッションを行った。内容はリニアックシ ステムの画像照合軸と照射軸の一致度の品質管理を1回のファントムセットアップとフリー画像解析ソフトウェアを使 用することにより、様々な施設で運用が可能であることを伝えた。また会場では日本ではまだ導入されていない治 療関連装置や品質管理機器の展示や説明を受けて、深く学ぶことが出来た。

清水 秀年

■愛知県がんセンター中央病院 放射線治療部 主任



American Association of Physicists in Medicine 2017 Annual Meeting (デンバー、アメリカ) / 2017.7.30~8.3

世界中の医学物理学・放射線治療技術学の研究者が集まる本学術大会において、高精度放射線治療装置トモ セラピーの治療時間の短縮と治療計画の線量ロバスト性に関する2演題を報告した。 期間中には乳癌エキスパン ダー周辺の地場による線量分布変化、シート状熱ルミネセンス蛍光素子による平面線量分布の取得などの興味深 い報告や国内未承認の機器の展示があり、大きな刺激を受けた。得られた知見については、さらなる継続研究 に活かし国際研究発表・論文報告を通して国内の放射線治療技術に関する研究の国際展開に貢献したい。

若杉 樹史

■兵庫医科大学病院 リハビリテーション部 理学療法士



研修施設等/渡航期間

研修施設等/渡航期間

The 45.Annual Meeting of the International Society on Oxygen Transport to Tissue (ISOTT2017) (ハレ、ドイツ) / 2017.8.18~8.25

今回、ISOTT 2017において「Muscle oxygen consumption and blood flow to the skeletal muscle in patients with malignant hematopoietic disease」というタイトルでポスター発表を実施した。この研究は、健 常人と血液腫瘍患者では運動中の筋肉の酸素動態が異なることを明らかにした。この発表は同会での論文投 稿にもつながり、がんのリハビリの効果を客観的な評価機器でとらえることに関心が高まっていることを実感するこ とができました。

藤原 紀子

■特定非営利活動法人JORTC 企画調整室 室長 がん看護専門看護師



①International Association of Clinical Research Nurses Conference (プロビデンス、アメリカ) ②Howard University・Georgetown University Medical Center(ワシントン、アメリカ) 2017.10.17 ~ 10.27

第9回IACRN年会にて、国際パネルディスカッション・支部委員会に出席、パネルを務め、日本支部の情報提供および支 援中の支部候補の国の状況を共有した。②米国臨床研究の拠点であるGeorgetown University病院の臨床研究病棟 を訪問した。臨床研究に関わる看護師の役割と管理者の役割、関連する教育について学んだ。連携しているHoward Universityでは、患者アドバイザリーボードに参加。患者自らが、研究を学び、研究者のプレゼンをもとに研究実施状況に ついて報告を受け、助言をするなど積極的な参加が見られた。これらの情報を日本の臨床研究看護に活かせるようにしたい。

大鷹

■首都大学東京大学院 人間健康科学研究科放射線科学域 博士前期課程2年・診療放射線技師



2017 IEEE Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference (アトランタ、アメリカ) / 2017.10.20~10.30

本助成を受け、上記学会にて最新素材の酸化物半導体の放射線影響に関し発表を行った。当学会は工学分野 の研究者を中心とする、最先端の医療・環境放射線検出器材、検出技術・物理学等の注目演題のみ採択される。 本研究は従来の検査より低被曝線量でがんの早期発見を提供する内容となっている。 発表を通じ、 使用素材に他 国の研究者より深く関心をお持ち頂き、今後の補足検討事項等ご意見を頂戴した。この経験は研究内容の改善と 自身の研究活動に対する姿勢を変革する意義のあるものとなった。この場をお借りし財団皆様へ感謝申し上げる。

HOPE事業等運営委員会報告

委員長 上田 龍三 (愛知医科大学 教授)

1. がんになっても生きる希望を持てる事業(HOPE事業)について

国の「がん研究10か年戦略」による研究支援事業を継続的に推進・支援していくため、平成27年度からの本財団事業として、がんになっても生きる希望を持てる事業(以下「HOPE事業」という。)を実施しております。

私は平成28年6月から当委員会の委員長として研究助成事業及び、個人または団体から使途の特定がなされて実施する「特別寄付金」による研究助成事業の審議に携わっております。

本事業の実施に当たっては、民間企業からの賛助金によりがん研究者に対する研究支援を行うものでありますので、ご理解ご協力の程宜しくお願い致します。

「がん」の撲滅、あるいは「がん」になっても支障なく日常生活が送れる事は、多くの方々の悲願であり、 その取り組みは官民挙げて、診療・予防を始め、がんの基礎研究、医薬品、医療機器開発などでも大きな成 果を上げております。

私も長年がん研究に携わってきたものとして、微力ではありますが、当財団のHOPE事業の発展に貢献できれば幸いです。

2. HOPE事業等運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の5名により構成されています。(五十音順)

上田 龍三 (愛知医科大学 教授)

坂元 亨宇(慶應義塾大学 教授)

菅野 純夫 (東京大学大学院 教授)

村上 善則(東京大学医科学研究所 教授)

吉倉 廣(国立感染症研究所 名誉所員)

3. HOPE事業等について

• シニア・リサーチフェロー研究助成金

がん研究の第一線で活躍されている研究者の指導を受け、将来の我が国のがん研究の中核となる若手研究者を育成するため、今までにない将来を見据えた研究実績を持つ若手上級研究者を対象とした目的の明確な育成事業です。

○平成29年度の助成(実績)

1件300万円助成 9件 助成額2.700万円

	氏名	所属機関	研究課題
1	柳下 淳	国立がん研究センター 東病院	新規がん幹細胞プローブの開発
2	足立 美保子	国立がん研究センター 研究所	がん全ゲノム・エピゲノムデータ解析パイプラインの開発と臨床を指向した新たな発がん分子機構解明への応用
3	野中 美希	国立がん研究センター 研究所	がん患者のQOL向上のための基礎研究を臨床開発につなげる橋渡し研究
4	富田 眞紀子	国立がん研究センター	婦人科がん患者の健康行動促進のためのリーフレット開発と評価
5	山野 荘太郎	国立がん研究センター 研究所	希少がん克服を目指したIER5-HSF1経路を基軸とした挑戦的開発研究
6	宮崎 利明	国立がん研究センター 研究所	難治がんの大規模シングルセル解析によるがん組織多様性の解明及び臨床応用
7	本多隆行	国立がん研究センター 研究所	遺伝要因による能動・受動喫煙による体細胞変異シグネチャーの異同の解明
8	相川 博明	国立がん研究センター	希少がんPDXモデルにおける新規開発薬剤の薬効薬理解析に関する研究
9	佐々木 由香	長崎大学大学院	難治性固形がん及び血液腫瘍に有効なポリ(ADP-リボース)集積を誘導する 新規抗がん剤のバイオマーカー研究

4. HOPE事業の研究成果について

幅広い分野の柔軟な発想を持った若手の人材をがん研究領域に積極的に取り込み、支援することを目的と して、平成27年度からシニア・リサーチフェローを新規事業として取り組んできました。

がん研究振興財団が昭和59年からリサーチ・レジデントの育成事業を国庫補助により委託し、平成26年 度までに約900名ががん研究、がん医療の第一線で広く活躍しておりますが、多くの研究者からの要望を踏 まえ、リサーチ・レジデント終了者を念頭に、上級若手研究者の育成を民間企業の皆様からの賛助により実 施しております。

国の財政が厳しい中、研究助成事業を含め将来独立した研究者を志向する若手研究者の育成に向けた本事 業は、財団に期待される事業の一つであります。

シニア・リサーチフェロー

氏 名 所属施設名及び職名

足立 美保子

■国立がん研究センター研究所 がんゲノミクス研究分野 特任研究員



研究課題名

がん全ゲノム・エピゲノムデータ解析パイプラインの開発と臨床を指向した新たな発がん分子機構解明への応用

近年大規模がん症例における全ゲノム配列(WGS)データ及びエピゲノムデータの蓄積が進んでいる。これらの大規 模データのポテンシャルを十分に活かすためには、効率的で柔軟性の高い解析パイプラインが必須となる。本研究で は、WGS・RNAシークエンス・ヒストン修飾データを統合して、がんゲノムに生じた染色体構造異常のがん化に与え る影響を評価するツールを開発した。本手法を用いてnon-coding RNAを含む全32,025遺伝子を体系的に解析し、 エクソン解読ではドライバー遺伝子が未同定である症例についてドライバー遺伝子候補を絞り込むことができた。

野中 美希

■国立がん研究センター研究所 がん患者病態生理研究分野 特任研究員



がん患者のQOL向上のための基礎研究を臨床開発につなげる橋渡し研究

抗がん剤による心毒性ならびにがん自身による心機能低下が近年問題となっている。 重篤な心毒性を発症するこ とが知られているドキソルビシンに対し、内因性ホルモンであるグレリンおよびデスアシルグレリンが心毒性抑制効 果を持つことをこれまで明らかにしてきた。 本研究の結果を元に、 国立循環器病研究センターとの共同臨床研究 も計画され、2018年度より開始される。今後もシニアリサーチフェローとして培った経験を活かし、抗がん剤によ る心毒性の予防・改善を通してのがん患者のQOL向上に貢献したい。

富田 眞紀子

■国立がん研究センター がん対策情報センター がんサバイバーシップ支援部 特任研究員



婦人科がん患者の健康行動促進のためのリーフレット開発と評価

がん経験者の健康行動研究では、積極的な健康行動とQOLの改善、身体機能の向上、生存率の向上などとの 関連が報告されている。本研究では、先行研究が少ない婦人科がん患者を対象とし、経済的・人的負担が少な く、行動変容や継続性の効果が高いと報告されているリーフレットによる健康行動支援の実現可能性を検討するた め、リーフレット配布前後で調査票調査を実施し、対象者の健康行動や健康状態の変化、リーフレット評価の解析 を行っている。今後はリーフレットの改良を進め、健康行動支援プログラムへの展開を行っていく予定である。

宮崎 利明

■国立がん研究センター研究所 がん分化制御解析分野 研究員



難治がんの大規模シングルセル解析によるがん組織多様性の解明及び臨床応用

がん組織は、多様な特性を持ったがん細胞とそれらを取り巻く様々なニッチ細胞から構成される複雑な組織であ り、これら全体像の理解は、がんの難治性に関わる様々な特性の解明、ひいては革新的治療法の開発に必須 である。本研究では、大規模シングルセル解析の技術を用い、がん組織を構成する各細胞の発現プロファイル の決定を行なっている。これらの情報の統合解析によりがん構成細胞の全体像を俯瞰し、これらの解析を様々 な腫瘍組織で行い、組織多様性の理解、及びがん難治性克服に向けた治療法開発の礎を築きたい。

本多 降行

■国立がん研究センター研究所 ゲノム生物学研究分野 特任研究員



遺伝要因による能動・受動喫煙による体細胞変異シグネチャーの異同の解明

肺腺がんは喫煙との関連が弱く、肺腺がんの高危険度群の把握は困難であった。しかし、我々はアジア人に特異 的な失活多型アレルが存在し、この多型が肺腺がんの発がんにおける喫煙のリスクを大きく上昇させるアジア人特有 の遺伝要因であることを同定した。更に発がんにおける喫煙の関与は、肺がんゲノムDNAに蓄積する体細胞変異 の塩基置換パターンによって可視化が可能であるため、代表的なサンプルに対して全エクソン解析を行い、この多 型に特徴的な塩基パターンを同定した。本邦の禁煙活動を支持する科学的エビデンスの構築に寄与したい。

所属施設名及び職名 氏 名

相川 博明

■国立がん研究センター 臨床薬理部門 特任研究員



研究課題名

希少がんPDXモデルにおける新規開発薬剤の薬効薬理解析に関する研究

希少がん領域では、未だに適切な動物モデルにてProof of Conceptが確認された非臨床試験が十分に行われ ていないのが現状である。本研究課題では、希少がん患者由来Patient derived xenograft (PDX) モデル を用いて、新規開発医薬品の薬効薬理試験を行うと共に、代謝関連分子群から薬効を示す因子探索を目的と する。現在、薬理試験およびその解析に取り組んでいる。本研究の推進により、医薬品開発研究迅速化の基 盤構築を目指す。

佐々木 由香

■国立がん研究センター 研究所 がん患者病態生理研究分野 研究員



難治性固形がん及び血液腫瘍に有効なポリ(ADP-リボース)集積を誘導する 新規抗がん剤のバイオマーカー研究

本研究では、細胞内ポリ(ADP-リボース)集積を介して、特定のがん細胞株に致死を誘導する新規の抗がん剤 候補化合物MO2455について、薬効予測バイオマーカー候補遺伝子を検討した。MO2455処理下において、 感受性を規定する大腸がん等の特定のがんで過剰発現を示す一遺伝子に注目した。過剰発現系において、 MO2455の感受性増強を認め、その機序を検討した。また、MO2455処理後の包括的な遺伝子発現変化を解 析し、その特徴的変化を把握した。今後、見出したバイオマーカー候補の臨床的意義の検証を進める。

がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会報告

委員長 **石塚 正敏** (跡見学園女子大学 教授)

1. がんサバイバーシップ研究支援事業の趣旨・目的

がんの診断や治療を受けた"その後"を生きていくプロセス全体として、がんが長く付き合う慢性病に変化しつつある今日、「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ための研究支援が喫緊の課題となっています。このため、(公財)がん研究振興財団は平成27年度からの新規事業として、我が国のがんサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に大きく貢献できる研究課題に対する支援事業を実施しております。

この研究支援事業については、患者本人や家族が本来の生活の場所—家庭、職場、学校、地域コミュニティなど—で暮らしていく過程で直面する、差別・偏見等の様々な課題解決に関する研究を確立するという大きな目標を有することから、民間企業からの賛助金により実施することとしています。

2. がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の9名により構成されています。(五十音順)

天野 慎介 (一般社団法人グループ・ネクサス・ジャパン 理事長)

(一般社団法人全国がん患者団体連合会 理事長)

石塚 正敏 (跡見学園女子大学 教授)

喜島智香子 (日本製薬工業協会 患者団体連携推進委員会 委員長)

桑原 節子 (淑徳大学 教授)

児玉 哲郎 (栃木県立がんセンター 名誉所長)

祖父江友孝 (大阪大学大学院 教授)

中川原 章 (地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館 理事長)

藤森 香衣 (株式会社 Ever Spring 代表取締役)

松田 周作 (富士フイルム株式会社ヘルスケア事業推進室マネージャー)

3. 平成29年度のがんサバイバーシップ研究支援事業について

(1) がんサバイバーシップ研究助成課題の公募

「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ため、わが国のサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題について、平成29年5月1日~5月31日の間、個人・団体・企業等を対象に公募を行い、37課題の応募を得ました。なお、応募資格については特に限定せずに広く募集しました。

(2) 平成29年度の助成(実績)

運営委員会において審議した結果、11課題を採択しました。

(11課題 助成総額515万円)

	氏名	所属機関	研究課題
1	溝田 友里	国立がん研究センター 社会と健康研究センター	乳がん患者の身体活動量増加のための運動プログラムの開発
2	宮内 眞弓	東京聖栄大学	がんサバイバーシップにおける食事支援〜かんたんおいしいレシピ の活用性の検証〜
3	平山 貴敏	国立がん研究センター中央病院	行動活性化療法を用いたがんサバイバーシップケアの開発
4	森島 敏隆	大阪国際がんセンター	笑い療法ががん患者のQOLに及ぼす効果の検証
5	松井 基浩	東京都立小児総合医療センター	AYA 世代がん患者の社会的、精神的問題に関する調査研究
6	山邊 惠里	早稲田大学大学院	がん患者が直面する治療と就労両立の困難の克服を課題とする法的 検討
7	松井 豊	筑波大学大学院	若年がん体験者のがん罹患が恋愛及び結婚に及ぼす影響について
8	渡邊 清高	帝京大学	がんの在宅医療と療養介護に関する患者・家族・支援者向け情報提供手法の最適化に関する研究
9	小林 京子	聖路加国際大学大学院	小児がん経験者の自立支援型長期フォローアップケア構築に向けた 包括調査
10	里見絵理子	国立がん研究センター中央病院	医師を対象としたがんサバイバーの慢性痛に対するオピオイド処方 に関する調査
11	平井 啓	大阪大学	働き盛りがん患者が「辞めないための意思決定支援」プログラムの 開発

4. がんサバイバーシップ研究支援事業の研究成果について

がんサバイバーシップ研究成果発表会

(平成30年1月19日 国立がん研究センター大会議室)

平成28年度に研究支援を実施した、一般課題8件、特別研究課題1件について研究成果発表会を行いました。 発表会は評価委員会を兼ねておりましたが、がんサバイバーシップに関連する様々な問題について、多くの 方々に認識していただくため一般の方々にも公開し、研究成果発表会として開催しました。

この研究成果発表会に引き続いて、がんサバイバーシップセミナーを開催し、がんサバイバーを取り巻く広 範囲にわたる諸問題に対し闊達な議論が行われ、今後の課題について共有できたことは、意義の深いものであっ たと考えます。

氏 名 所属施設名及び職名

溝田 友里

■国立がん研究センター社会と健康研究センター 保健社会学研究部健康増進科学研究室 室長



研究課題名

乳がん患者の身体活動量増加のための運動プログラムの開発

乳がんの診断後の身体活動量が、患者の予後を改善しQOL向上に役立つことが期待され、世界的にも研究が蓄積 されつつある。しかし、乳がん患者の身体活動量は一般女性に比べ少なく、また診断後に減少する傾向にあること がわかってきている。そこで私たち国立がん研究センター保健社会学研究部では、運動やマーケティング、映像作 成の専門家、乳腺外科医、乳がん患者さんなどの協力を得て、患者が一人でも継続可能な運動プログラムの開発 を行うこととした。完成したプログラムの動画は、今後保健社会学研究部のホームページで公開予定である。

宮内 眞弓

■東京聖栄大学 健康栄養学部管理栄養学科 准教授



がんサバイバーシップにおける食事支援~かんたんおいしいレシピの活用性の検証~

がんサバイバーにとって「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ためには食事支援は重要な位置づけとな る。がん診断後・治療や手術などによる機能の欠損を補うための食事の工夫、がんサバイバーとして仕事との 両立するための食生活の工夫、高齢者がんサバイバーの食事関連事項の情報提供が必要となっている。食事 の工夫、食材、食事関連器具など幅広く食の関連事項を研究し、情報提供するために「こころとからだを支え るがンサバイバーのためのかんたんおいしいレシピ」の作成を行った。

平山 貴敏

■国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科 医員



行動活性化療法を用いたがんサバイバーシップケアの開発

がん患者は、再発不安や死への恐怖を反芻して自ら活動抑制的な生活を送ることで、より気分が落ち込むという 悪循環に陥っている場合がある。行動活性化療法は、本来の「自分らしい」生活を送れるよう支援することで充 実感や喜びを取り戻す治療法であるが、がん患者に対するエビデンスは十分に確立されていない。我々は、国 際的なエビデンスを確立するため、まずは予備的調査を開始した。これまで14名が介入を終了し、現在解析中 である。今後エビデンスを確立し、他のケアと複合的に発展させて質の高いサバイバーシップケアを構築していく。

森島 敏隆

■大阪国際がんセンター がん対策センター リーダー



笑い療法ががん患者のQOLに及ぼす効果の検証

研究内容

漫才や落語といった笑いのライブを定期的に観賞することががん患者の生活の質(Quality of life, QOL)を向上 させるかどうかを示すことを目的とした無作為化比較試験(RCT)である。 笑いの効果を検証した既存研究は国 内外に数多くあるが、本研究は患者本位の全人的な評価指標であるQOL を測定する点、RCT である点、継 続的介入による効果を検討する点が特徴である。がんサバイバーシップ充実という社会的ニーズに応えるため、 笑い療法が補完療法の一端になり得るかどうかの検証をしていく。

松井 基浩

■東京都立小児総合医療センター 血液・腫瘍科 医師



AYA世代がん患者の社会的、精神的問題に関する調査研究

研究内容

研究報告:日本でのAYA世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関しての全国的な調査報告は少なく、以下4分野 に関する全国規模の調査を実施し、必要とされる支援の確立を目指すことを目的とした研究である。

- ① AYA世代がん患者の就学、就労に関する調査 ② AYA世代がん患者の恋愛、結婚に関する調査
- ③ AYA世代がん患者の精神・心理的問題に関する調査
- ④ AYA世代がん患者の医療費に関する調査
- 2017年度は上記4分野に関して、 アンケート内容の検討、アンケートのWeb上でのシステム構築を行った。2018年4月から 実際のアンケートを開始する予定となっている。

氏 名

所属施設名及び職名

山邊 惠里

■早稲田大学 大学院法学研究科



研究課題名

がん患者が直面する治療と就労両立の困難の克服を課題とする法的検討

近年、就労世代のがん患者の増加に伴い、治療の影響による労働能力の低下や長引く治療を原因として失職 等の不利益が生じるなど、がん患者が仕事について抱える問題は社会的にも注目されている。一方、がん対策 基本法における雇用継続等を目的とする規定も整えられ、また、がんに罹患した従業員を支援する企業も登場 してはいるが、これらは企業の自主的取組みを基礎とするもので、法制度的な課題は未だ残っているといえよう。 そこで本研究では、がん患者の治療と就労の両立に関する問題について、法的視点からの検討を試みる。

松井

■筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授



若年がん体験者のがん罹患が恋愛及び結婚に及ぼす影響について

若年がん体験者では、進学・就職・結婚・出産などの重要なライフイベントが、がんの診断や治療と重なる時 期である。 なかでも、 恋愛や結婚の問題は、 生命を脅かす疾患に罹患したとき、 最も話題にしづらいことのひと つであると考えられる。そこで、本研究では、がん罹患による恋愛・結婚に関する問題について、若年がん体 験者、若年がん体験者のパートナー、がん罹患のない未婚男女の三者の視点から検討している。29年度は、 若年がん体験者へのweb調査を実施した。219名の有効回答を得て、現在解析中である。

渡邊 清高

■帝京大学 医学部内科学講座 腫瘍内科 准教授



がんの在宅医療と療養介護に関する患者・家族・支援者向け情報提供手法の最適化に関する研究

地域におけるがん患者の療養環境を考慮するにあたり、住民や医療者を含めた関係者の主体的な関与を促す 創意工夫が求められる。在宅療養のガイドブックを活用し、複数のモデル地域での取り組みをもとに、市民向け パンフレットと研修会・フォーラム実施マニュアルを作成した。多職種・行政・医師会・拠点病院・大学などさま ざまな実施主体によって企画されたパイロット地域からのフィードバックを得ながら、「がんになっても尊厳を持って 安心して暮らせる社会の構築」に向けた人材育成のあり方の提示を行っていく。

小林 京子

聖路加国際大学大学院 看護学研究科 教授



小児がん経験者の自立支援型長期フォローアップケア構築に向けた包括調査

本研究は、人間ドックを利用した身体機能の実態と、質問紙調査を用いた経験者のフォローアップに関する認識・ セルフケア行動・受診行動の実態を明らかにし,自立支援型フォローアップケアの具体策を検討することを目的と している。2018年1月末現在,合計30名の20歳以上の小児がん経験者が調査に参加し,治療歴に基づいた晩 期合併症のリスク・人間ドック調査で明らかになった身体機能・病気の理解/セルフケアのアセスメントを統合し た個別のフィードバックシートの作成により、フォローアッププランの体系化を進める予定である。

里見 絵理子

■国立がん研究センター中央病院 緩和医療科 科長



医師を対象としたがんサバイバーの慢性痛に対するオピオイド処方に関する調査

がん治療の進歩により、多くのがん患者が根治または長期予後を得られるようになった。早期からの緩和ケアが 推奨され、苦痛により早く対処される一方で、長期経過において術後疼痛や副作用の苦痛も重なり、強オピオイ ド使用量や継続の判断が難しいことがある。がんの長期経過の中で、医療者は、病態を適切に評価し、強オ ピオイドの必要性の評価や適正使用が求められるが実態は明らかでない。本研究では、医師のがんサバイバー の慢性疼痛におけるオピオイド使用の実態を調査し、適正使用を目指した医師教育へつなげたい。

平井 啓 ■大阪大学経営企画オフィス 准教授





働き盛りがん患者が「辞めないための意思決定支援」プログラムの開発





がん医療の進展とそれに伴う治療期間の延長により、がん患者が継続的に就労し、安定した収入を得ることの重要性が増している。しかし現状では、副作用への対応や意思決定困難を原因として、就労困難・経済的困窮に陥る患者も多く、患者に対する相談支援も十分ではない。そこで、がん患者と支援者双方にインタビューを行い、就労に影響する要因や意思決定のプロセス、相談支援の具体的内容や問題点について検討している。また、患者に対する意思決定・問題解決支援を適切に行うための教育プログラムの開発と、有効性の評価を行っている。



平成29年度におきましても、多くの方々からご寄付をいただき、誠に有難うございました。 ここにご芳名をご披露させていただきます。

これらのご寄付は、がんで亡くなられた方のご遺志を活かすために寄せられたもの、がん と闘ったことのあるご本人から寄せられたもの、そして、その他一日も早くがんの克服され ることを願う人々から寄せられたものです。

当財団と致しましては、貴重なご芳志にお報いするため、がん克服を目指す研究や診療の 進歩に有効に活用させていただきますことをお誓いして、お礼に代えさせていただきます。

公益財団法人 がん研究振興財団

平成29年度(平成29年4月1日~平成30年3月31日)

住	所	氏 名	
千美	葉 県	鈴 木 広 晃	様
広	島 県	野 中 俊 志	様
埼	E 県	岡 戸 洋 一	様
東,	京都	国立がん研究センター中央病院 放射線治療部・診断部	様
福局	岡 県	中 野 芳 子	—— 様
大阝	反 府	松原都築	— 様
兵员	車県	池 田 恢	様
茨均	成 県	行方ふるさと活性化委員会	— 様
		(以上 受付)	順)
		他 匿名 19 名	様

ご寄付に添えられたお言葉の一部を 紹介させていただきます。

- 沢山の方からのお気持ちが集まったものです。 何卒宜しくお願い致します。
- 1人でも多くのがん患者を救うために役立てて頂きたいと思います。
- 茨城県は全国的にがん検診率等が低く、何か出来ないかと思い、啓発運動の一環として毎年開催している我々のイベントで募金活動を行いました。 行政、市民、一般企業一体となり協力したこの取り組みが周りに伝わっていく事を願っています。

~ご厚志ありがとうございました~

ご寄付についてのお問い合わせ先

お問い合わせは下記までお願い致します。ご寄付の申し込みを希望される方には寄付申込書、銀行及び郵便局の振込 用紙(払込手数料は不要)、特定公益増進法人であることの証明書(寄付金控除等の税法上の特典が受けられる)等の 関係資料をお送りさせて頂きます。

〒104-0031 東京都中央区京橋 2 - 8 - 8 新京橋ビル 5 階

公益財団法人 がん研究振興財団 TEL 03 (6228) 7297

FAX 03 (6228) 7298

E-mail: info@fpcr.or.jp

ホームページ http://www.fpcr.or.jp/donation/

会 長 荒蒔 康一郎 (キリンホールディングス株式会社 元会長) 理 事 長 堀田 知光 (国立研究開発法人国立がん研究センター 名誉総長) 理 事 上田 龍三 (愛知医科大学医学部 教授) 同 垣添 忠生 (公益財団法人日本対がん協会 会長) 同 関谷 剛男 (公益財団法人佐々木研究所 常務理事・研究所長) 同 田中 利彦 (田中綜合法律事務所 代表弁護士) 同 山口 俊晴 (公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事 病院長) 監 事 亀口 政史 (亀口公認会計士事務所 所長)

評 議 員 石田 昌宏 (参議院議員) (日本製薬団体連合会 理事長) 同 木村 政之 久保田 政一 (日本経済団体連合会 事務総長) 澁谷 正史 (上武大学 学長) 同 同 菅野 純夫 (東京医科歯科大学) 同 田島 和雄 (三重大学大学院医学系研究科 客員教授) 中釜 斉 (国立研究開発法人国立がん研究センター 理事長) 同 野田 哲生 (公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事 研究所長) 同 同 宮園 浩平 (東京大学大学院医学系研究科 教授) 同 村上 善則 (東京大学医科学研究所 所長 教授)

顧 問 大竹 美喜 (公益財団法人がん研究振興財団 前会長) 同 高山 昭三 (公益財団法人がん研究振興財団 前理事長)

あとがき

がん研究振興財団の機関誌「加仁」は、昭和44年6月15日、蟹の絵を表紙に配した創刊号が発行され、このたび第45号を発刊することになりました。

刊行に当っては、巻頭言をはじめ、特集や委員会報告などに諸先生方から原稿を頂戴しました。 あらためて御礼申し上げます。

表紙の題字と蟹の絵は、本誌創刊にご尽力いただいた故久留 勝先生(第3代国立がんセンター総長)により描かれ、表紙絵の解説を含めがん克服の思いが力強く表れ、現在も「加仁」に引き継がれております。

さて、がん研究振興財団は平成24年4月公益法人制度改革により、内閣総理大臣から公益認定の認可を受け5年を経過しますが、昨今公益法人の事業運営についての問題が大きく取り上げられております。

当財団は全ての事業が公益法人認定法に基づく 公益目的事業(学術、技芸、慈善その他の公益に 関する別表各号に掲げる種類の事業であって、不 特定かつ多数の者の利益に寄与するもの)となっ ていることから、本号の巻頭言では当財団理事の 田中弁護士に、法律家としての観点から公益法人 について寄稿頂きました。当財団事業に更なるご 理解を頂けますと幸甚です。

また、当財団が築地から京橋に移転して1年が経ちましたが、前号で「国際研究交流会館」の完成当時の写真を掲載したところ、多数の先生方から当時の思い出をお伺いする機会に恵まれました。あらためて「加仁」を創刊号から閲読しましたところ、思い出にまつわるエピソードに触れることができました。

皆様の思い出等を誌面でご紹介出来るよう、今 後の課題とさせて頂きます。

本誌についてのご意見、ご感想を是非事務局までお寄せ下さい。

(事務局長 西山)

加 仁 第45号 2018

平成30年 5月発行

編集代表堀田知光

発 行 公益財団法人 がん研究振興財団

T104-0031

東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階

TEL 03(6228)7297

FAX 03(6228)7298

E-mail: info@fpcr.or.jp

ホームページ http://www.fpcr.or.jp/

全国がんセンター協議会加盟施設一覧表

(平成30年1月現在)

北海道がんセンター	〒003-0804 札幌市白石区菊水4条 2-3-54	☎ (011)811-9111
青森県立中央病院	〒030-8553 青森市東造道 2-1-1	8 (017)726-8111
岩手県立中央病院	〒020-0066 盛岡市上田 1-4-1	☎ (019)653-1151
宮城県立がんセンター	〒981-1293 名取市愛島塩手字野田山 47-1	☎ (022)384-3151
山形県立中央病院	〒990-2292 山形市大字青柳 1800	8 (023)685-2626
茨城県立中央病院	〒309-1793 笠間市鯉淵 6528	8 (0296)77-1121
栃木県立がんセンター	〒320-0834 宇都宮市陽南 4-9-13	8 (028)658-5151
群馬県立がんセンター	〒373-8550 太田市高林西町 617-1	8 (0276)38-0771
埼玉県立がんセンター	〒362-0806 北足立郡伊奈町小室780	☎ (048)722-1111
国立がん研究センター東病院	〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1	☎ (04)7133-1111
千葉県がんセンター	〒260-8717 千葉市中央区仁戸名町 666-2	8 (043) 264-5431
国立がん研究センター中央病院	〒104-0045 中央区築地 5-1-1	8 (03)3542-2511
がん研有明病院	〒135-8550 江東区有明 3-8-31	8 (03)3520-0111
東京都立駒込病院	〒113-8677 文京区本駒込 3-18-22	8 (03)3823-2101
神奈川県立がんセンター	〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2	8 (045) 520-2222
新潟県立がんセンター新潟病院	〒951-8566 新潟市中央区川岸町 2-15-3	8 (025)266-5111
富山県立中央病院	〒930-8550 富山市西長江 2-2-78	8 (076)424-1531
石川県立中央病院	〒920-8530 金沢市鞍月東 2-1	8 (076)237-8211
福井県立病院	〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1	8 (0776) 54-5151
静岡県立静岡がんセンター	〒411-8777 駿東郡長泉町下長窪 1007	8 (055) 989-5222
愛知県がんセンター	〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1	8 (052)762-6111
名古屋医療センター	〒460-0001 名古屋市中区三の丸 4-1-1	☎ (052)951-1111
滋賀県立総合病院	〒524-8524 守山市守山 5-4-30	8 (077) 582-5031
大阪医療センター	〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2-1-14	☎ (06)6942-1331
大阪国際がんセンター	〒541-8567 大阪市中央区大手前 3-1-69	8 (06)6945-1181
兵庫県立がんセンター	〒673-8558 明石市北王子町 13-70	8 (078) 929-1151
呉医療センター・中国がんセンター	〒737-0023 呉市青山町 3-1	☎ (0823)22-3111
山口県立総合医療センター	〒747-8511 防府市大字大崎 10077	8 (0835)22-4411
四国がんセンター	〒791-0280 松山市南梅本町甲 160	क (089)999-1111
九州がんセンター	〒811-1395 福岡市南区野多目 3-1-1	☎ (092)541-3231
佐賀県医療センター好生館	〒840-8571 佐賀市嘉瀬町大字中原400	8 (0952)24-2171
大分県立病院	〒870-8511 大分市大字豊饒 476	8 (097)546-7111

※全国がんセンター協議会HPより

全国がんセンター協議会に属しているこれらの施設は、がんの専門医を多数擁して、がんの診断と治療に積極的に取り組んでいます。

当財団の事業活動の多くは、皆様からの尊いご寄附により 支えられています。

皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げます。

がんを防ぐための 5 12か条

あなたのライフスタイルをチェック そして今日からチェンジ!!

1 条	たばこは吸わない
2 条	他人のたばこの煙を避ける
3 条	お酒はほどほどに
4 条	バランスのとれた食生活を
5 条	塩辛い食品は控えめに
6 条	野菜や果物は不足にならないように
7条	適度に運動
8 条	適切な体重維持
9条	ウイルスや細菌の感染予防と治療
10 条	定期的ながん検診を
11 条	身体の異常に気がついたら、すぐに受診を

発行 公益財団法人 がん研究振興財団 〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階 TEL 03 (6228) 7297 FAX 03 (6228) 7298 E-mail: info@fpcr.or.jp ホームページ http://www.fpcr.or.jp/

12条 正しいがん情報でがんを知ることから